明倫歌集

全

384.6
7
2

明倫歌集

德川齊昭編

縣城內
校學門
舍
書函

明倫歌集

序

かけまくも、かしこき、天津日の皇子の尊の、大御世しろしめしける、神つ代のさまは、すべらぎのたかくたふとく、おはしますより、おほみたからの、しもが下に至るまで、ますみ鏡の清き眞心もて、天津神國津神に、いつきつかへまつりて、たまちはふ、神ならひのまに〳〵、ならしばのならひなれつゝ、大八洲の國、浪たひらかに、おだしかりしかば、ことさらにをしへごととたてゝことあげせしことこそは、あらざりしかど、ことさへぐもろこし人の、五の教もすべて、この神ならひの中にこ

もらひ備はりて、たらはぬかたもなくなむ有りける。しかあるは、父母をたふとび、はらからをうつくしむよりはじめて、わかくさの妻とあるいもは、定めたるわがせをおきて、外に男はなしといふ心をすせりひめの尊はうたひ給ひ、おみとしてつかふるものは、山ゆかば草むす屍、海ゆかば水つく屍、大王のみことのまに〳〵こそ、身をばつくさめといふ心を、ゆぎかくる大伴氏の遠つおやは、言たてせしなど、人の世となりても、ならふべきためしに、いひつぎけらし、かゝれば名にたてたる、をしへごとのしげき國よりも、こよなくたちまさりて、空蟬の世の人心にうらうへなく行ひ、はた正しかりしかば、神ならひの眞心を、ふかくあつく、うけ來ぬるによりてなりけり。かくて世々に時につけ

つゝ、心のまことをあらはして、うたひとうたひ、よみとよむ歌ども、おほきが中に、かきなす琴の、ことさらびて、をしへぐさとこゝろつくろひたる、わざにはあらで、いにしへ心の、おのづから言葉の花に、にほひいでたるが、のちのちまでも、まれ〳〵殘れるは、うちきく人の教となれるを、見きくにつけて、おほよそに思ひすぐさむは、いともあたらしければ、人々にもこと仰せて、海人のかるもの、かきあつめたるに、數多年へて、かずつもりぬれば、いかで世のうなゐごどもの、くちずさびにもなさしめて、古へよりの、あかき心の下染にも、なさせまほしくて、さらにえりとゝのへしむるに、玉だれのうちより、もり出たる、たかくたふときみことをもはばからず、ちりにまみれる道芝のみじかくいやし

きが、詞とても、つみすてぬは、古き世々に跡おほかれば、今もゆるさるるかたなるべし。大凡歌は千うたにあまり、卷は十卷にみちぬれば、是を名づけて人の道を明らむる歌ぶみといふ。しかはあれども、藻にうづもるゝ白玉はひかりしられず。いさごにまじる黄金は、拾ふにつきぬたぐひにて、猶もれたるもおほかめれど、さるは又つぎつぎにも物すべし。あはれ此歌世にひろまり、人の心によくそみて、まめに雄々しかりし、神つ代ぶりに、かへらひ行て、大御國のみひかり、ますゝに四方の海の外までも、てりかゞやかば、内つ御國はいよゝうらやすくして、しき波のいやつぎ〳〵に、古の道うたふ人、おほからむには、このふみの跡こゝにつきず。後の世にも選びかさねて、いく卷ともつもらま

しかば、つひには、さひづるや、外國人らに、わが神國の道をさとす、はしだてともなり行きなまし。しかあらむには、おのれがねがひ思ふにあまりありて、いかばかりか、かしこきさいはひとも、のべつくしがたくぞあらむ。かく云ふは年の名をよろこびながしといひそめて、四かへりにあたれる年の秋、御世なが月とことほく、なかばさかり久しき、菊の雫をときはの硯にそゝぎて、命も長き筆をそめつゝ、これを記。

權中納言源朝臣齊昭

目次

卷之一

君臣……一

卷之二

父子……七二

卷之三

夫婦……一五五

卷之四

兄弟……二一五

朋友……二四一
卷之五
雜部……二六六
卷之六
神祇……二九七
卷之七
國體……三二五
卷之八
文……三三九
卷之九

武……三六五
卷之十
拾遺……三七九

明倫歌集

徳川齊昭編

第一 君臣歌

後柏原天皇御製
御着到和歌

治めしる我が世いかにと浪風の
八十島かけてゆく心かな

同
聖廟法樂和歌

いかにせば月日を同じ心にて
雲の上より世を照らさなむ

光嚴天皇御製
風雅集

照りくもり寒きあつきも時として
民に心のやすむまもなし

後醍醐天皇御製
續後拾遺集

世をさまり民やすかれと祈るこそ
我が身に盡きぬ思ひなりけれ

後宇多天皇御製
新千載集

時しあれば谷より出づる鶯に
世をたすくべき人を問はゞや

後村上天皇御製
新葉集

仕ふべき人やのこると山ふかみ
松のとざしも猶ぞ尋ねむ

後奈良天皇御製
續撰吟集

曇りなき天つ日つぎを瑞垣の
うけて久しき身に祈るかな

亀山天皇御製
新後撰集

すべらぎの神のみことをうけ來つゝ
いやつぎ〳〵に世を思ふかな

後村上天皇御製
新葉集

高御座幌掲げて橿原の
宮のむかしも著き春かな

二條天皇御製
玉葉集

空はれし豐のみそぎに思ひ知れ
なほ日の本の曇なしとは

後宇多天皇御製
續千載集

いとゞまた民安かれと祈るかな
我が身世に立つ春のはじめは

後醍醐天皇御製
新千載集

民の爲時ある雨を祈るとも
知らでや田子の早苗とるらむ

同
續千載集

いそぐなる秋の砧の音にこそ
夜寒の民のこゝろをも知れ

後鳥羽天皇御製
續後撰集

夜を寒みねやの衾のさゆるにも
わら屋の風を思ひこそやれ

後光嚴天皇御製
新拾遺集

今更に年のくれともおどろかず
いそぎなれたる朝まつりごと

後村上天皇御製
新葉集

鳥の音におどろかされて曉の
ねざめ靜に世をおもふかな

伏見天皇御製
新拾遺集

神や知る世の爲とてぞ身を思ふ
身の爲にして世をば祈らず

崇光天皇御製
新千載集

鈴鹿川八十瀨の波のたちゐにも
我が身の爲の世をば祈らず

伏見天皇御製
玉葉集

徒らに安き我が身ぞ恥かしき
苦しむ民の心おもへば

同
新千載集

世をすくふ心のうちのなほざりに
民の愁をなすぞ悲しき

光嚴天皇御製
新後拾遺集

十年餘り世をたすくべき名は舊りて
民をし救ふ一こともなし

同
風雅集

祈る心私にては石清水
濁りゆく世を澄ませとぞ思ふ

後醍醐天皇御製
新葉集

身に代へて思ふとだにも知らせばや
民の心の治めがたさを

後嵯峨天皇御製
續後拾遺集

なかゝに人より物をおもふかな
世を思ふ身の心づくしは

後鳥羽天皇御製
續後撰集

人もをし人もうらめしあぢきなく
世を思ふ故に物おもふ身は

後醍醐天皇御製
増鏡

あはれとは汝も見るらむ我が民を
思ふ心は今もかはらず

後光嚴天皇御製
新千載集

なほざりに思ふ故かと立ちかへり
治まらぬ世を心にぞとふ

後醍醐天皇御製
風雅集

治まれる跡をぞ慕ふ押並べて
誰が昔とは思ひわかねど

後嵯峨天皇御製
玉葉集

この君の御代かしこしと吳竹の
末々までもいかでいはれむ

花園天皇御製
風雅集

葦原やみだれし國の風をかへて
民の草葉も今靡くなり

後鳥羽天皇御製
新古今集

奥山の棘が下も踏み分けて
道ある世ぞと人に知らせむ

後宇多天皇御製
續千載集

春秋のかげを並べて見つるかな
我がすべらぎの同じ光に

孝謙天皇御製
萬葉集

四の船はや歸り來と白紙着け
我が裳の裾に祝ひて待たむ

桓武天皇御製
萬葉集

此の酒は凡にはあらず平かに
歸り來ませと祝ひたる酒

後村上天皇御製
新葉集

位山越えても更に思ひ知れ
神も光りを添ふる世ぞとは

後光嚴天皇御製
新拾遺集

世を治め民をあはれぶまことあらば
天つ日嗣の末もかぎらじ

龜山天皇御製
續拾遺集

岩清水絶えぬ流れは身にうけつ
吾が代の末を神にまかせむ

伏見天皇御製
玉葉集

代々たえずつぎて久しく榮えなむ
豐葦原の國安くして

後村上天皇御製
新葉集

四方の海波も治まるしるしとて
三の寶を身にぞ傳ふる

二品法親王深勝

同

民安く國治まれと祈るかな
人のひとより我が君の爲め

續千載集

民安く國豐なる御代なれば
君を千歳と誰れか祈らぬ

一條内大臣 内實

新千載集

我が心君ぞ知るらむ代を祈る
外には又も思ひ無しとは

二品法親王慈道

風雅集

片岡の岩根の苔路踏みならし
動きなき世を猶祈る哉

賀茂惟久

後葉集

一宮紀伊

萬代をまつのを山のかげ茂み
君をぞ祈る常磐堅磐に

入道前太政大臣女

内裏九十番歌合

春日山常磐の松のかげにゐて
猶すべらぎの千歳祈らむ

津守國平

續後撰集

我が君を松の千年と祈るかな
代々につもりの神のみやつこ

新千載集

津守國夏

怠らず祈るも御代の爲なれば
君と神とに身は仕へつゝ

津守國清

内裏九十番歌合

住吉の神に仕ふる身にしあれば
君をぞ祈る萬代までに

賀茂在藤朝臣

玉葉集

君が爲七瀬の淀にみそぎして
八百萬代を祈りそめぬる

賀茂經久

續現存六帖

神山のみねに生ひそふ玉椿
八千代は君の爲と祈らむ

藤原季經朝臣

千載集

諸神の心に今ぞかなふらむ
君を八千代と祈る誠は

祝部行氏

新拾遺集

神垣に御代治まれと祈るこそ
君に仕ふる誠なりけれ

同

君が代を祈る心のまことをば
僞なしと神は受くらむ

從三位常昌

家集

稲荷山ゆきかふ人は君が代を
一つ心に祈りやはせぬ

伊勢

續古今集

君を祈るたゞ一言の神のみや
二心なき程は知るらむ

賀茂氏久

新古今集

君を祈る心の色を人問はゞ
糾の森のあけの玉垣

前大僧正慈圓

雪玉集

君を仰ぐ心を問はゞ葵草
向ふ日かげをさして答へむ

道遙院内大臣 實隆

雲玉抄

君を祈る願を空にみてたまへ
別雷の神ならば神

賀茂重保

新葉集

君を祈る道にいそげば神垣に
はや時告げて鳥も啼くなり

津守國貴

同

おきゐつゝ君を祈れば神垣に
心かよはぬ曉もなし

從二位隆基

續後撰集

神垣や三室の榊木綿かけて
祈る八千代もたゞ君のため

權大納言實雄

續後拾遺集

木綿かけて御代をぞ祈る榊とる
八十氏人の同じ心に

權中納言公雄

春葉集

のがれても身は奥山の榊葉の
榮行く世をば祈らざらめや

荷田東麻呂

新古今集

神風や賢木の葉をとりかざし
内外の宮に君をこそ祈れ

後惠法師

鶴山詠草

我が君が千代に八千代の末かけて
祈りおかまし伊勢の神垣

參議源治紀

月清集

民も皆君に心をつくば山
茂き惠の雨けぶる世に

後京極攝政前大政大臣 良經

古今集

筑波根の此の面彼の面にかげはあれど
君がみかげにます影はなし

讀人不知

風雅集

沈む身と何思ひけむ佐保川の
深き恵のかゝりける世に

芬陀利花院前關白内大臣 内經
後福光園院攝政前大政大臣 良基

新續古今集

愚なる身にこそ更に知られぬれ
人をし捨てぬ君が恵は

大江宗秀

風雅集

天の下誰れかはもれむ日の如く
皺しもわかぬ君が恵は

新續古今集

末遠く猶こそ仰げ敷島の
道より廣き君が恵を

權大納言爲遠

萬葉集

武士の臣のをとこは大君の
任けのまに〳〵聞くとふものぞ

讀人不知

同

けふよりは顧みなくて大君の
醜の御楯と出で立つ我は

今奉部與曾布

同

天地の神を祈りて幸矢貫き
筑紫の島をさしていく我は

太田部荒耳

同

大君の命かしこみ磯に觸り
海原わたる父母をおきて

丈部造人麿

同

大王の命に在れば父母を
齋瓶とおきて參出來にしを

雀部廣島

同

大王の命かしこみ青雲の
たなびく山を越えて來ぬかも

小長谷部笠麿

新勅撰集

山は裂け海は涸せなむ世なりとも
君に二心我れあらめやも

鎌倉右大臣實朝

新葉集

君の爲世の爲何か惜しからむ
捨てゝかひある命なりせば

中務卿宗良親王

瓊玉集

在りて身のかひやなからむ國の爲　　中務卿宗尊親王
民の爲にと思ひなさずば

新葉集

思ひかねスりにし山をわけすてゝ　　文貞公師賢
迷ふうき世もたゞ君の爲

承久記

勅なれば身をばよせてき物部の　　鏡月坊
八十宇治川の瀬には立たねど

家集

今更に何か思はむ早くより　　楫取魚彦
君に奉せるかばねなるはや

萬葉集

楯並めていづみの川の水脈たえず　　境部宿禰老麿
仕へ奉らむ大宮處

同

天地と相榮えむと大宮を　　大納言巨勢朝臣奈良麿
仕へ奉れば貴く嬉しき

古今集　讀人不知

美濃の國關の藤川たえずして
君に仕へむ萬代までに

家集補　大中臣能宣

君が代に水底澄める岩清水
流れて千代に仕へ奉らむ

拾遺愚草　權中納言　定家

神も見よ賀茂の川波ゆきかへり
仕ふる道にわけぬ心を

新千載集　前中納言　宣明

仕へ來て一つ流れのたえせねば
曇らじと思ふ我が心哉

同　後光明照院前關白左大臣　道平

千早振神代の契たえもせず
今も仕へて年ぞ經にける

內裏九十六番歌合　左大臣　公賢

君が爲二心なき心にて
仕ふる道に六十經にけり

新千載集
かくしつゝつもる六十の老の坂
さかしき道に猶ぞ仕ふる

大納言經顯

續拾遺集
年たけて思ひもよらず君が代に
又つかふべき道のありとは

兵部卿隆親

新拾遺集
老らくの白髪までに仕へ來て
けふの行幸に逢ふが嬉しさ

六條内大臣 有房

新葉集
思ひきや三代につかへて芳野山
雲井の花に猶なれむとは

前大納言 光有

同
つかふとて先づ踏分けし九重の
雲井の庭の雪のあけぼの

文貞公 師賢

萬葉集
降る雪の白髪までに大君に
仕へまつれば貴くもあるか

左大臣橘宿禰 諸兄

拾遺愚草
霜雪の白髪までに仕へ來ぬ
君が八千代を祝ひおくとて

權中納言 定家

新古今集
朝毎に汀の氷ふみわけて
君に仕ふる道ぞかしこき

土御門内大臣 通親

新拾遺集
五代まで君につかへて年寒き
松の心はならひ來にけり

中園入道前大政大臣 公實

五百番歌合
今ははや覺えず年もくれにけり
身を忘れつゝ仕へ來しまに

前大納言 有光

續拾遺集
仕へつゝ家路いそがぬ夜なゝの
更け行く鐘を雲井にぞ聞く

前大納言 良教

同
鳥の音ぞ曉ごとに馴れにける
君につかふる道いそぐとて

前大納言 爲氏

天明五年歌合

雲井にぞいそぎつかふる天の戸の
あけの袂のかずならぬ身も

左大臣 政顯

新續古今集

世を祈る身にしあらねばいかでわが
君に仕ふる數となるべき

祝部成前

續後拾遺集

うしとても君に仕ふる數なれば
身になぐさめて世をば恨みじ

從三位爲信

風雅集

同じくはおとろへざりし本の身を
今にかへして世につかへばや

藤原時藤

新葉集

命あれば衣をたれし古に
たちかへりてぞ又つかへける

前大納言 光任

玉葉集

君が經む千代に八千代の末までも
我身かはらず仕へてしがな

山階入道前左大臣 實雄

新千載集

色かへぬ黒髪山の山かつら　　従二位行家
かくてや久につかへまつらむ

百首和歌

君をいのる賀茂の社の木綿襷　　源晴信
かけて幾世かわれもつかへむ

近代著到御百首

つかふるも心のいさむ御代にあひて　　右大辨賢房
かしこき君を仰ぐ諸人

鶴山詠草

梓弓八島の外もおしなべて　　参議源治紀
わが君が代の道あふぐらし

萬葉集

天地に足はし照りて我が大君　　大伴宿禰家持
しきませばかも樂しき小里

同

御民我れ生けるしるしあり天地の　　海犬養宿禰岡麿
榮ゆる時にあへらく思へば

續後拾遺集　源俊頼朝臣

千歳とも御代をばさゝじ敷島や
大和島根の動なければ

萬葉集　春日老

大君は千歳にまさむ白雲も
みふねの山にたゆる日あらめや

同　大伴宿禰家持

大君はときはにまさむ橘の
殿のたち花ひたてりにして

千載集　皇太后宮大夫俊成

百千度浦島が子はかへるとも
はこやの山はときはなるべし

玉鉾百首　平宣長

物皆はかはりゆけども現つ神
わが大君の御代はとこしへ

拾遺愚草　權中納言定家

鹿島のや檜原杉原常磐なる
君がさかえは神のまに〳〵

山家集

大海の潮引く山になるまでに
君はかはらぬ君にましませ

西行法師

續千載集

君はたゞ心のまゝのよはひにて
千とせ萬代數もかぎらじ

前中納言爲相

古今集

古に在りきあらずは知らねども
千歳のためし君に初めむ

素性法師

壬二集

ふる雪もてらす日かげも君が代の
空に盡きせぬためしなりけり

從二位家隆

心珠詠草

めぐる日のかはらぬかげや君が代の
限しられぬ例なるらむ

三光院内大臣實枝

詠百首

幾千代もおなじ月日のめぐり來て
かはらぬ御代は空にしるしも

散位隆實

宮内省圖書寮文庫藏

金葉集

瑞垣の久しかるべき君が代は
天てる神や空にしるらむ

藤原爲忠

鶴山詠草

天照す内外の神も隔てなく
くもらぬ君が御代守るらむ

參議源治紀

新續古今集

八百萬そこらの神の年なみに
よるひる守る君が御代かな

前大納言　匡房

新續古今集

曇らじな天つ日嗣のあとうけて
昔にかへる御代のみかげは

前中納言　實任

五百番歌合

神代より絶えせぬ天つ日嗣とて
げにくもりなき君はわが君

源　成直

續後撰集

神代より今我が國に傳はれる
あまつ日つぎの程ぞ久しき

中原師光

五百番歌合

神の代の三種の寶傳へます
わが天皇の道ぞ正しき

左衛門督 長親

詠百首

君が代は猶行末も久方の
天にはじめし神のまに〳〵

中務卿宗良親王

夫木抄

伊弉諾の尊の時に定めてき
我が君久に世にまさむとは

仲實朝臣

詞花集

君が代の久しかるべきためしにや
神も植ゑけむ住吉の松

讀人不知

家集

住吉の岸に並みたつ松も皆
千とせは君にゆづるべらなり

源兼澄

月清集

それもなほ千代の限のありければ
松だにしらぬ君が御代哉

後京極攝政前大政大臣 良經

續古今集

けふよりぞちゞの松原契りおく　大藏卿爲長
花は十かへり君は萬代

夫木抄

神垣やゆきめぐりても君ぞ見む　嘉陽門院越前
生ひそふ松の萬代の影

高陽院七番歌合

君が代はかねてぞしるき春日山　正家朝臣
二葉の松の神さぶるまで

萬代集

君が代は天照神の宮つくり　贈大納言時信
八百萬たび改まるまで

今撰和歌集

君が代は千尋の底のさゞれ石の　三位源頼政
鵜のゐる磯の顯はるゝまで

古今集

我が君は千代に八千代にさゞれ石の　讀人不知
巖となりて苔のむすまで

拾遺集

君が代は天の羽衣まれに來て
撫づともつきぬ巖なるらむ

讀人不知

夫木抄

大空に川べの石は上りつゝ
星となるとも君はわすれじ

衣笠内大臣 家良

春葉集

仰がばや星の林も我君の
八百萬代のかずにかぞへて

荷田東麿

新續古今集

身につもる年に萬代とりそへて
けふ我が君に奉るかな

康資王母

夫木抄

年を經て生ひそふ竹の園の中に
盡きせざるべき君が御代かな

大藏卿有家

月清集

吳竹の園よりうつる春の宮
かぬても千代の色ぞみえにき

後京極攝政前大政大臣 良經

新續古今集

天の下のどかなる世となりにけり
君が恵みや空に満ちぬる

前中納言　雅孝

新古今集

君が代にあへるは誰もうれしきを
花は色にも出でにけるかな

刑部卿範兼

同

身にかへて花もをしまじ君が代に
見るべき春のかざりなければ

参河内侍

續古今集

色々にさかえて匂ふ櫻花
我がきみ〳〵の千代のかざしに

入道前大政大臣　公經

玉葉集

千々の春萬の秋にながらへて
月と花とは君ぞ見るべき

鎌倉右大臣　實朝

新後拾遺集

限りなく世をこそ照らせ空にすむ
月日や君が御影なるらむ

權大納言　忠光

玉葉集

諸共に君ぞすむべき久方の
天照る月の萬代の秋

後花山院入道右大臣 定雅

續千載集

風わたる民の草葉も年あれば
君にぞなびく千代の秋まで

前大納言 基良

三十六番歌合

道を知り人を知る世の治りて
君になびかぬ草も木もなし

權中納言 政顯

天正記

君も臣も心あはせて治むてふ
世の聲しるし庭の松風

近衛左大臣 信輔

古今集

伏して思ひ起きてかぞふる萬代は
神ぞ知るらむ我君の爲

素性法師

萬葉集

天地と相さかえむと思ひつゝ
仕へまつりし心たがひぬ

讀人不知

萬葉集

東の瀧のみかどに侍へど　讀人不知

きのふもけふも召すこともなし

同

はしきやし榮えし君のいましせば　資人金明軍

昨日も今日も吾をめさましを

同

綠兒のはひたもとほり朝よひに　同

ねのみぞわが泣く君なしにして

萬葉集

久方のあめみるごとく仰ぎ見し　柿本朝臣人麿

皇子の御門のあれまくをしも

高倉天皇升遐記

天雲のはれずも物のかなしきは　土御門内大臣通親

大空さへや君を戀ふらむ

後撰集

人の世の思にかなふものならば　三條右大臣定方

わが身は君におくれましやは

後撰集
はかなくて世をふるよりは山科の
宮の草木とならましものを　同

千載集
老らくの命のあまり長くして
君に二たびわかれぬるかな　藤原長能

新葉集
今はまた涙になしてつゝむかな
袖にあまりし君が恵を　關白左大臣經忠

千載集
常に見し君がみゆきをけふ問へば
かへらぬ旅と聞くぞ悲しき　法印澄憲

續古今集
おくれゐて思ひやるこそ悲しけれ
高野の山のけふのみゆきは　皇大后宮大夫俊成

宮川歌合
道かはるみゆき悲しき今夜かな
限りのたびと見るしつけても　西行法師

後拾遺集

おくれじと常のみゆきは急ぎしを
烟にそはぬ旅の悲しさ

大納言行成

大鏡

かけまくもかしこき君が雲の上に
けふりかゝらむ物とやはみし

常陸國農民

玉葉集

みがゝれし玉のうてなを露深き
野べにうつして見るぞ悲しき

西行法師

續世繼物語

思ひきや虫のねしげき淺茅生に
君を見すてゝ歸るべしとは

藏人實重

新葉集

思ひきや山路のみゆき踏分けて
亡きあとまでも仕ふべしとは

前大納言 光任

新古今集

君なくてよるかたもなき青柳の
いとゞうき世ぞ思ひ亂るゝ

權中納言 國信

古今集

水の面にしづく花の色さやかにも
君がみかげの思ほゆるかな

小野篁朝臣

同

皆人は花の衣になりぬなり
苔の袂よ乾きだにせよ

僧正遍昭

同

草ふかきかすみの谷にかげかくし
照る日のくれし今日にやはあちぬ

文屋康秀

後拾遺集

などてかく雲かくるらむかくばかり
のどかにすめる月もある世に

命婦乳母

新千載集

雲の上はかはりにけりと聞ものを
みし世に似たる夜半の月かな

皇太后宮大夫俊成

玉葉集

二年の秋のあはれは深草や
さが野の露もまた消ぬなり

前大納言　爲兼

續千載集

時雨さへかゝる秋こそ悲しけれ
涙ひまなきころの袂に

新宰相

萬葉集

堀江には玉敷かましを大君の
御船はてむとかねて知りせば

左大臣橘宿禰諸兄

元正天皇御製

萬葉集

玉しかず君が悔いていふ堀江には
玉しきみてゝつぎて通はむ

聖武天皇御製

萬葉集

よそにのみ見てはありしを今日見れば
年にわすれずおもほゆるかも

左大臣橘宿禰諸兄

萬葉集

葦はふいやしき宿も大君の
まさむとしらば玉敷かましを

中將伊衡

大鏡

一とせにこよひ數ふる今よりは
百年までの月かげを見む

醍醐天皇御製
大鏡
祝ひつることばだまならば百年の
後もつきせぬ月をこそみめ

後村上天皇御製
新葉集
袖ふるゝ花橘のをりを得て
かざすあやめの長きためしぞ

妙光寺内大臣家賢
新葉集
橘のかげふむけふのあやめ草
長き例の惠をぞしる

東三條入道關白太政大臣兼家
新古今集
かゝるせもありけるものを
宇治川の絶ぬ計も歎きつるかな

圓融天皇御製
新古今集
書よりたえせぬ川の末なれば
よどむ計を何歎くらむ

前大納言 爲氏
新後撰集
和歌の浦にひとり老ぬる夜の鶴の
子の爲おもふねこそ鳴かるれ

崇光天皇御製
新後撰集
和歌の浦に子をおもふとて鳴鶴の
聲は雲井に今ぞきこゆる

孝謙天皇御製
萬葉集
大舟に眞梶しゞぬきこのあごを
から國へやる祝はへ神たち

萬葉集
春日野にいつく御室の梅の花
さかえてあり待てかへり來るまで

藤原清河

萬葉集
長月のその初雁の使にも
思ふこゝろは聞え來ぬかも

遠江守　櫻井王

聖武天皇御製
萬葉集
おほの浦のその長濱によする波
ゆたけく君をおもふこのころ

後村上天皇御製
新葉集
世の爲もあらましかばと思ふにぞ
いとゞ涙のかずはそひける

新葉集

歎きわびなきをば夢とおもふ身に
あらましかばと聞くぞ悲しき

右近大將長親母

後村上天皇御製

新葉集

今更に音にこそたつれ三年まで
あやめもしらで過し悲しさ

新葉集

あやめをも知らで過ぎこし程よりも
けふこそ更にねをば添けれ

前大納言　實爲

古今集

忘れては夢かとぞおもふおもひきや
雪踏分て君を見むとは

在原業平　朝臣

古今集

夢かとも何か思はむ浮世をば
背かざりけむ程ぞくやしき

惟喬親王

新葉集

おもへたゞ花さく春を待かねて
連なる枝の枯しめしを

前大納言　爲定

新葉集

連らなりし枝もあらばと思ひ出て
花さく春は猶や尋ねむ

中務卿宗良親王

明倫歌集

卷第二

父子歌

萬葉集

白金もこがねも玉も何せむに
増れる寶子にしかめやも

山上憶良

家集

何事も心にあらぬ身なれども
子の寶こそ先はほしけれ

相模

花山天皇御製
續古今集

思ふこと今はなきかな撫子の
花さくばかり成りぬと思へば

後嵯峨天皇御製
續古今集

いろ〳〵に枝をつらねて咲きにけり
花もわが世も今さかりかも

拾遺愚草

待ち得つる古枝の藤の春の日に
こずゑの花を並べてぞ見る

權中納言 定家

同

袖せばくはぐくむ身にもあまるまで
この春にあふ御代ぞうれしき

同

衆妙集

あら玉のことしは世をもゆづるはの
ときはの色に傚へとぞ思ふ

源藤孝

續拾遺集
契あれば身のおもひ出の日蔭草
この世をかけて又結ぶかな
藤原爲綱　朝臣

新古今集
草分けてたちゐる袖のうれしさに
絶えず涙の露ぞこぼるゝ
赤染衛門

千載集
嬉しさをかへす〳〵もつゝむべき
苔の衣のせばくもあるかな
入道前中納言雅兼

一條天皇御製
續古今集
二葉より松のよはひを思ふには
けふぞ千年のはじめなりける

三草集
若みどりさすがに千代のおひ先も
こもる二葉の松の色かな
少將源定信

新古今集
春日山谷の松とは朽ちぬとも
梢にかへれ北の藤波
皇太后宮大夫俊成

萬葉集

言とはぬ木すらいもとせ有とふを　　市原王

たゞ一人子にあるがくるしさ

同

憶良等は今はまからむ子泣くらむ　　山上憶良

そのかの母も我を待つらむぞ

同

すべもなく苦しくあれば出で走り　　同

否とおもへど子らに障りぬ

同

富人の家のこどもの着る身なみ　　山上憶良

腐しすつらむ絹綿らはも

土佐日記

世の中におもひやれども子を戀ふる　　紀貫之

思にまさるおもひなきかな

後撰集

人の親の心はやみにあらねども　　兼輔朝臣

子を思ふ道に惑ひぬるかな

新葉集

位山跡をたづねて上れども
子をおもふ道に猶惑ひぬる

土御門内大臣 通親

別雷社歌合

子を思ふ道にぞ祈るすべらぎに
仕ふる跡をたがへざらなむ

左大辨雅頼

新後撰集

立ちかへり捨てゝし身にもいのるかな
子をおもふ道は神もしるらむ

皇太后宮大夫俊成

後拾遺集

思ひやれまだ鶴の子のおひ先を
千代もとなづる袖のせばさを

藤三位 親子

新千載集

思ひやれ子を思ふ鶴の一つがひ
同じ音に鳴く夜の心を

藤原基任

風雅集

九の澤に鳴くなるあしたづの
子をおもふ聲は空にきこゆや

藤原基俊

玉葉集

年を經て霜の下なるあしたづの
子をおもふ音に春をしらせよ

從二位家隆

詞花集

夜の鶴みやこの内にこめられて
子をこひつゝも鳴きあかすかな

高内侍

新千載集

子を思ふ涙くらべば夜の鶴
われおとらめや音に立てずとも

後三條前内大臣 實忠

新古今集

いかにせむ我が世ふけひのうらみても
子を思ふ鶴の愚なる身を

權中納言 雅世

新葉集

難波江や蘆間の波のよるの鶴
子を思ふ道は障らずもがな

權大納言 公夏

康富記

明らけき月の夜にしも子を思ふ
心のやみの鶴は鳴くなり

中原朝臣 康富

後拾遺集
五月闇子戀の杜の杜鵑　藤原兼房朝臣
人しれずのみ啼きゐたるかな

新千載集
月見ても慰みなましなぞもかく　前大納言經繼
心のやみに子を思ふらむ

夫木抄
幼なき我が子を奈良の里におきて　藤原基俊
こよひの月に面影に立つ

十六夜日記
君をこそ朝日と頼め故郷に　阿佛尼
殘すなでしこ霜に枯らすな

太平記
あはれなり日影まつ間の露の身に　中院大納言公宗
思ひおかるゝ撫子の花

新古今集
よそへつゝ見れどつゆだに慰まず　惠子女王
いかにかすべき撫子の花

後撰集
撫子はいづれともなく匂へども
おくれて咲くはあはれなりけり
貞信公 忠平

酒々舎集
はぐゝむも慕ふも同じ心には
何事をかは思ひへだてむ
清水濱臣

拾遺愚草
子をおもふ深き涙の色に出て
あけの衣のひとしほもがな
權中納言 定家

拾遺集
久方の月の桂も折るばかり
家の風をも吹かせてしがな
菅原大臣 道眞母

新古今集
あらく吹く風はいかにと宮城野の
小萩が上を人のとへかし
赤染衛門

新古今集
小篠原風まつ露のきえやらで
この一ふしを思ひ置くかな
皇太后宮大夫俊成

載千新集
水莖の岡べのさゝの一ふしも
此世に殘すことのはもがな
藤原信良

詞花集
木の下にかきあつめたる言の葉を
はゝその杜のかたみとは見よ
源義國妻

東歌
子をおもふ親のをしへの庭つ鳥
かけて忘るな殘す一言(ひとこと)
橘枝直

同
愚さのおやに似よとはおもはねど
訓(をし)へおかるゝ子のゆくへかな
同

家集
人の世は露なりけりと知りぬれば
親子の道に心おかなむ
源重之

明日香井集
今はわれ心のやみも春にあひぬ
子をおもふ方の道はまどはじ
參議雅經

萬葉集

から衣すそに取りつき泣く子らを
おきてぞ來ぬや母なしにして

他田舍人　大島

同

旅人のやどりせむ野に霜ふらば
わが子はぐゝめ天の鶴群

作者不知

十六夜日記

いかばかり子を思ふ鶴の飛びわかれ
ならはぬ旅の空に鳴くらむ

和德門院新中納言

古今集

足乳根のおやの守りと相そふる
心ばかりはせきなとゞめそ

小野千古母

金葉集

磯菜つむ入江の波の立ちかへり
君みるまでの命ともがな

平康貞女

拾遺集

諸共にゆかぬ三河の八橋は
こひしとのみや思ひわたらむ

源嘉種妻

新葉集　右近大將　長親

いとせめて老いぬる身こそ悲しけれ
このわかれ路を限りとおもへば

千載集　成尋法師母

忍びども子のわかれ路をおもふには
から紅の涙こそふれ

新拾遺集　同

唐土へゆく人よりもとゞまりて
からき思ひは我れぞまされる

衆妙集　源義八

二世とは契らぬものをおやと子の
別れむ袖のあはれとをしれ

萬葉集　作者不知

若ければ道ゆきしらじ賂ひはせむ
下方の使負ひて通らせ

同　同

幣おきて我れは乞ひ禱む欺かず
たゞに幸行きて天路しらしめ

齊明天皇御製
日本紀
あすか川漲らひつゝ行く水の
あひだもなくもおもほゆるかも

神祇伯顯仲
詞花集
あさましや君に着すべき墨染の
衣の袖をわがぬらすとは

赤染衞門
風雅集
我がために着よとおもひし藤衣
身にかへてこそ悲しかりけれ

源道濟
新古今集
はかなしといふにもいとゞ涙のみ
かゝる此の世を頼みけるかな

源有長朝臣
新千載集
頼むべき末葉の露を先だてゝ
殘るわが身ぞ置所なき

前大納言爲世
續後拾遺集
先立ちて消えぬる露の命にも
かはらで殘る老が身ぞうき

悼信貞文

先立たぬ命そつらきながらへて　林永善
この別れにも逢ふとおもへば

同

思ひきや殘るかひなき老鶴の　同
子を先だてゝねに泣かむとは

同

集めよといさめし窓の螢さへ　同
今はこがるゝおもひなりけり

新千載集

思ひきや六十路あまりの坂こえて　大炊御門前内大臣母
この別路に迷ふべしとは

家集

さもこそは人におとれる我れならめ　源重之
おのが子にさへおくれぬるかな

新葉集

時雨より猶さだめなく降るものは　中務卿宗良親王
おくるゝ親の涙なりけり

うなゐ松

恨めしないかなる世より親に子の
先立つ道のありそめぬらん

豐臣勝俊

同

時のまも見ねばいづらとさわがれし
人にわかれて幾日經ぬらむ

同

醍醐天皇御製
續古今集

春ふかきみ山櫻もちりぬれば
世を驚のなかぬ日ぞなき

玉葉集

九重(ここのへ)も花の盛となる中に
我が身一つや春のよそなる

清愼公實賴

家集

春は花秋はもみぢと散りしかば
たちかくるべき木の下もなし

伊勢

上東門院
後拾遺集

見るまゝに露ぞこぼるゝおくれにし
心もしらぬなでしこの花

正木葛

古づかの松ぞつれなき見るたびに
すがりしものを撫子の露

三浦元連

雲錦集

なでしこの花もまがきに殘らずば
何に心をなぐさめてまし

賀茂季鷹

三草集

あすよりは何をたのみに眺めまし
嵐に枯れし撫子の花

少將源定信

詞花集

人しれず物おもふ折もありしかど
このことばかり悲しきはなし

待賢門院 安藝

累葉集

一年(ひとせ)もすぎぬ飼ふ蠶(こ)の命には
くはこき垂れて母ぞ泣くなる

田邊通直妻

拾遺集

なよ竹の我が子のよをば知らずして
おふし立てつと思ひけるかな

平兼盛

明日香井集
ぬば玉のこの黒髪をかきなでゝ
おもひし末にかゝるべしやは

參議雅經

うなゐ松
黒髪も長かれとのみかきなでし
など玉のをの短かゝりけむ

豐臣勝俊

同
夜の鶴やみになくねをいかばかり
苔の下にもあはれとや聞く

同

明日香井集
苔の下も見る心地する面影に
はぐゝみたてし袖ぞくちぬる

參議雅經

金葉集
諸共に苔の下には朽ちずして
埋もれぬ名を見るぞ悲しき

和泉式部

拾遺集
忘られてしばしまどろむ程もがな
いつかは君を夢ならでみむ

中務

後拾遺集　藤原實方朝臣

うたゝねのこのよの夢のはかなさに
覺めぬやがての命ともがな

同　和泉式部

殘しおきて誰れをあはれとおもふらむ
子はまさるらむ子はまさりけり

土佐日記　紀貫之

なかりしもありつゝかへる人の子の
ありしもなくてくるが悲しさ

累葉集　口口因命

人のおやの心をやみにたとへしも
月見てはれぬ思ひにぞしる

萬葉集　坂田部首麻呂

眞木柱ほめて作れる殿のごと
いませ母とじ面かはりせず

萬葉集　市原王

春草は後はうつろふ巖なす
ときはにいませ尊き我君

鳳山詠草

心ある君を木かげに待ちとりて
花も色香をけふは添ふらむ

權中納言源綱條

うけらが花

八千年の齡を經つゝ玄孫の
其のやしはごも君ぞ見るべき

橘千蔭

續古今集

たらちねの道のしるべの跡なくば
何につけてか世につかへまし

前大納言爲家

古鄕紀行

生し立てし親なかりせばいかにして
君の惠を我れはうくべき

平景隆

六帖詠草

家富みてあかぬ事なくつかふとも
報いむものか親の惠は

小澤蘆庵

新千載集

七十の老の坂まで相そへる
おやの守りに身をも立てつゝ

按察使實繼

篠の葉草

安かれとおもふこの身ぞ梓弓
八十路にちかき親の爲なる

源貞辰

續古今集

たらちねの心のやみを知るものは
子をおもふ時の涙なりけり

前大納言基長

新千載集

人の子のおやになりてぞわが親の
思ひはいとゞおもひしらるゝ

康資王母

六帖詠草

子を思ふ道にまどひて今ぞしる
ちゝぶの山のふかき恵を

小澤蘆庵

同

をしからぬ命ながらも足乳根の
ある世はかくてあるよしもがな

同

近世名家集

をしからぬ身ぞをしまるゝたらちねの
おやの殘せるかたみと思へば

口口元政

續後撰集　前大納言　爲家

老らくの親の見るよと祈りこし
わがあらましを神やうけゝむ

新千載集　賀茂久世

たらちねの老のかすみの厭はれて
我が身をしらぬ年の暮かな

門葉集　鶴若丸

やゝつもるわが身の年をおもふにも
まづたらちねの老ぞ悲しき

草庵集　頓阿法師

あらき風ふせぐたよりをいかゞせむ
老木のはゝぞ朽ちはてぬまに

新葉集　文貞公

かげよわるはゝその紅葉いかならむ
この下道のあれはてしより

後鳥羽天皇御製

たらちめの消えやらでまつ露の身を
風より先にいかでとはまし

旬題和歌

秋の日は山の端近し暮れぬまに　大江千里
母にみえなむ歩め我が駒

萬葉集

白玉のみがほし君をみず久に　大伴宿禰家持代妻
鄙にしをれば生けるともなし

同

月日夜はすぐはゆくとも母父が　中臣部國足
玉の姿は忘れせなふも

萬葉集

時々の花はさけどもなにすれぞ　丈部眞麿
母とふ花の咲きてこずけむ

同

たちちねの母が手はなれかく計り　讀人不知
すべなきことは未だせなくに

後撰集

神無月時雨ふるにもくるゝ日を　八歳女
君待つほどは長しとぞ思ふ

太平記

つくづくとおもひくらして入相の
鐘を聞くにも君ぞ戀しき

八歳宮 恒良親王

後拾遺集

信濃なるそのはらにこそあらねども
我がはゝきゞと今は頼まむ

平政家

萬葉集

天雲の退方の極みわがもへる
君にわかれむ日近づきぬ

阿部朝臣老人

萬葉集

父母が殿のしりへのもゞよ草
百世いでませわがきたるまで

生玉部足國

同

父母を祝ひて待たね筑紫なる
みづく白玉取りて來までに

川原虫麿

同

たゝみけめむらしが磯の放り磯の
母を放れて行くが悲しさ

生部道麿

萬葉集

父母も花にもがもや草枕　旅はゆくとも捧ごてゆかむ　丈部黒當

同

母刀自は玉にもがもや頂きて　髮の中にあへまかまくも　津守宿禰小黒栖

同

水鳥のたちのいそきに父母に　物いはすげにて今ぞ悔しき　上丁牛麿

同

旅ゆくにゆくとしらずて父母に　言申さずて今ぞ悔しき　川上巨老

同

我が母の袖もちなでゝ我が故に　泣きし心を忘らえぬかも　物部手力良

同

父母がかしらかき撫で幸あれと　いひし詞ぞ忘れかねつる　丈部稲麿

萬葉集
忘らむと野ゆき山ゆき我れくれど　商長歴
我が父母は忘れせぬかも

平家物語
薩摩潟沖の小島に我れありと　康頼入道
親にはつげよ八重の汐風

道行振
たらちねの親に告げばやあらしてふ　源貞世
岩國山も今日はこえぬと

萬葉集
津の國の海のなぎさに舟よそひ　丈部足人
たしても時に母がめもがも

同
難波津によそひ〳〵てけふのみや　丸子部連多歴
出でゝまからむ見る母なしに

同
千早振神のみかさに幣まつり　神人部子忍男
いはふ命は父母が爲め

萬葉集

天地のいづれの神を祈らばか
うつくし母に又ことゝはむ

大伴部麻與佐

六帖詠草

父母の旅なる我れをおもふらむ
待つらむさまの俤に見ゆ

小澤蘆庵

雲葉集

もろこしの梢もさびし日の本の
はゝその紅葉ちりやしぬらむ

權僧正榮西

十訓抄

いかにせむいくべき方もおもほえず
親に先立つ道をしらねば

小式部内侍

裏父詞

先立たばいかに歎かむ足ちねの
子を思ふ道は我も知りぬる

豐臣勝俊

まかひつる木

いかにせむはゝその杜の老木より
猶下草の枯れぬべき身を

源重之子僧

相模

家集
都なる親を戀しとおもふにも
いきてのみこそ見まくほしけれ

續千載集
よしさらばこの度つきぬ我が涙
またもあるべき別れならねば

津守國冬

家集
死出の山かへる〳〵もしるべせば
おやの先にぞ我は立たまし

源兼澄

拾玉集
みなし子のたぐひ多かる世なれども
たゞ我のみと思ひしられて

前大僧正慈鎮

玉葉集
嵐ふくみやまの里に君をおきて
心も空にけふはかへりぬ

從二位倫子

常山詠草
わくらはに問ふ人もなき山の奥に
ひとりも君をすてゝゆくかな

贈大納言源光圀

新葉集　中務卿宗良親王

おくれじとおもひし道もかひなきは
この世の外の三よしの〻山

玉葉集　源道濟

かへりてはまづたらちねを見しものを
今日は誰にか逢はむとすらむ

新古今集　皇太后宮大夫俊成

今はさはうき世のさがの野べをこそ
露消え果てし跡と忍ばめ

果葉集　□□重堅

身にはまだしらぬ涙の藤衣
かゝる袂ぞはじめなりける

新古今集　藤原秀能

露をだに今はかたみの藤衣
あだにも袖をふくあらしかな

續拾遺集　祝部成茂

限あれば我とは染まぬ藤衣
涙の色にまかせてぞ着る

拾遺集
限あればけふぬぎすてつ藤衣
はてなきものは涙なりけり　藤原道信　朝臣

玉葉集
見るからに落つるなみだの玉くしげ
みに傳ふべきかたみなりけり　權大納言　內經

續拾遺集
たらちねの親のいさめの形見とて
習ひしことのねをのみぞなく　藤原公世　朝臣

新千載集
たらちねのあとにのこりて笛竹の
よにはしられぬ音こそなかるれ　藤原業清　朝臣

千載集
たらちめやとまりて我を惜まゝし
かはるにかふる命なりせば　顯昭法師

玉葉集
たらちねの老のよはひに生れあひて
久しくそはぬ身をぞ恨むる　前中納言　爲相

新千載集

夢にだに相見ることは片丘の　　權中納言　基隆

あはれ親なき身とぞ成りぬる

金葉集

玉くしげかけこに塵もすゑざりし　　讀人不知

二親ながらなきぞ悲しき

家集

泣く〳〵も別れし時をわかれにて　　賀茂眞淵

わかるゝおやのなきぞ悲しき

拾玉集

墨染の袖をぞしぼるたらちねの　　前大僧正　慈鎮

あらましかばと思ひつゞけて

千首

あはれてふ事につけつゝ口のはに　　中務卿宗良親王

我がたらちねのかゝらぬはなし

續拾遺集

足ちねのあらばあるべき齡ぞと　　從二位能清

おもふにつけて猶ぞ戀しき

新後撰集
たらちねの在りしその世にあはれなど　天台座主　道玄
おもふ計りもつかへざりけむ

正木葛
あはれなり曉ふかくおき出でゝ　岡本道壽
今はつかへむたらちねもなし

龜山天皇御製
新後撰集
大井川行く瀨の波もおなじくば
昔にかへれ君がかげ見む

續古今集
たらちねのなからむ後の悲しさを　前大納言　爲家
思ひしよりも猶ぞ悲しき

累葉集
なき跡に物おもひ草植ゑずとも　□□普隆
こは忘るべき親の上かは

雲玉抄
我が宿の門田の早苗の穭穂を　曾根好忠
見るにつけても親ぞ戀しき

正木葛

面影をうつしとめつゝはゝきゞの
あるかと見てもなきぞ悲しき

松山富久

漫吟集

蔭とせしはゝそはかれて春雨に
あらぬこのめの何潤ふらむ

阿閣梨契沖

正木葛

去年のけふはゝその杜のかれしより
たのむかげなく紅葉しぬるゝ

月野木清興

新葉集

散り果てしはゝその杜のなごりとも
しらる計りのことのはもがな

中務卿宗良親王

新千載集

垂乳根のあらばといとゞかきくれて
なみだにまよふ敷島の道

従二位隆教

歌仙落書

教へおくそのことの葉を見るたびに
又とふかたのなきぞ悲しき

前大納言實之

續古今集　藤原隆祐　朝臣

ことのはゝ身にこそしらねたらちねの
形見ばかりにとふ人もがな

新後拾遺集　前大納言　爲氏

たらちねのありていさめし言の葉は
なき跡にこそ思ひしられ

百番自歌合　兵部少輔中原遠忠

かひなしや親のいさめしふることを
老いてぞ更に思ひしりぬる

新後撰集　丹波　長有　朝臣

傳へ聞くことのはにこそ殘りけれ
おやのいさめし道芝の露

新後拾遺集　道遙院内　大臣　實隆

忘られぬおやのいさめの言の葉ぞ
しのぶの露の置き所なる

永正四年御百首　前中務少輔季經

愚なる我ぞかひなきたらちねの
いさめしことは忘れはてねど

百首　慈照院左大臣　義政

おろかなる身を歎くにもたちちねの
親のいさめを戀ひぬ日はなし

續拾遺集　從二位顯氏

わかれをば一夜の夢と見しかども
おやのいさめぞ絶えて久しき

新後撰集　前大納言　爲家

たちちねの親のいさめのかず〳〵に
思ひ合せて音をのみぞなく

新千載集　前大納言　爲家

そむきけむ親の諫めの悲しきに
はるゝ計りの道をみせばや

同　權中納言　爲明

上りえぬこの一坂はたちちねの
いさめし道や踏みたがへけむ

續拾遺集　前大納言　爲氏

在りし世の親のいさめのまゝならば
悔しく身をば歎かざらまし

心珠詠草

物毎にくやしくもあるか父母の
いさめし頃はおもひしらずて

三光院内大臣　實枝

新撰六帖

たらちねの親のいさめも昔にて
身は老ほれの果ぞ悲しき

前左京權大夫行家

新葉集

あはれにもなき面影のかよひける
親のいさめしうたゝねの夢

右近大將　長親

累葉集

物おもふわが轉寐をたよりにて
いさめしおやを夢に見しかな

□□正善

家集

世はことになりにけれども足乳根の
おなじさまにて夢に見えける

源　道濟

新千載集

たらちねのありて見しよは隔たれど
忘れぬ影ぞ月にことゝふ

前大納言　爲氏

新後撰集
足ちねのおやの見しよの秋ならば
月にも袖はしぼらざらまし　中臣祐親

拾遺風體集
昔にもなさじとぞおもふたらちねの
名殘をしらで行く月日かな　前中納言　爲相

夫木抄
足乳根の跡とて見れば小倉山
むかしの庵ぞ昔に殘れる　法眼慶融

新拾遺集
たらちねの昔の跡と思はずば
松の嵐やすみうからまし　前大納言　爲家

新千載集
嬉しきに先づ昔こそ戀しけれ
はゝその杜を見るにつけても　權僧正永緣

新古今集
昔だにむかしと思ひしたらちねの
猶戀しきぞはかなかりける　皇太后宮大夫俊成

拾玉集
いわけなきそのかみ山に別れにし　前大僧正　慈鎮
我がたらちねの道を知らばや

新勅撰集
行末にかゝらむ身とも知らずして　源　師光
わが足ちねのおほし立てけむ

後撰集
たらちめはかゝれとてしもぬば玉の　僧正遍昭
我が黒髪を撫でずやありけむ

うけらが花
たらちねの撫でし昔を忘れねば　橘千蔭
かきも拂はぬ元結の霜

續古今集
けふまでもうきは身にそふさがなれば　前大納言　爲家
三年の露のかわく間もなし

伏見天皇御製
新後拾遺集
數ふれば十年あまりの秋なれと
おもかげちかき月ぞかなしき

三草集

父母のまさばとばかり老らくの　少將源定信
けふの莚に敷き偲ぶかな

東歌

うれしくも老いぬればこそたらちねの　橘枝直
五十年の御靈けふ祭りけれ

同贈答歌

花山天皇御製
詞花集

世の中にふるかひもなき竹の子は
我が經む年を奉るなり

冷泉天皇御製
詞花集

年經ぬる竹のよはひをかへしても
子のよを長くなさむとぞおもふ

後龜山天皇御製
新葉集

かくてのみ絶えずきかばやそのかみの
秋思ほゆる峯の松風

嘉喜門院
同

あはれとも君ぞきゝける今ははや
吹きたえぬべき峯の松風

嘉喜門院
新葉集

四つのをの調にそへし松風は
聞きしにもあらぬ音にやありけむ

後龜山天皇御製
同

松にふく風は昔の秋ながら
半の月やおもかはりせし

日下部使主三中之母
萬葉集

家にして戀ひつゝあらずば汝が佩ける
太刀になりてもいはひてしがも

同

たらちねの母をわかれてまこと我れ
旅のかりほに安く寢むかも

日下部使主三中

後龜山天皇御製
新葉集

をしむにもよらぬ別れはうきものと
君ゆゑ花や思ひしるらむ

嘉喜門院
同

あかずして別れしまゝに留め置きし
心や花をさそひ來にけむ

宇治拾遺物語

人しれず身はいそげども年をへて
など越えがたき逢坂の關

謙德公伊尹

同

東路に行きかふ人にあらねども
いつかはこえむ逢坂の關

九條右大臣師輔

千載集

故郷の板間の風にねざめして
谷の嵐を思ひこそやれ

中納言定頼

同

谷風の身にしむごとに故郷の
子のもとをこそ思ひやりつれ

大納言公任

家集

雲拂ふ風につけても山里の
月かげいかに冴えて澄むらむ

康資王母

同

風はやみさえもさえずも山里は
みやこの月ぞ面かげに立つ

女

風雅集

子を思ふ心や雪にまよふらむ
山のおくのみ夢に見えつゝ　皇太后宮大夫俊成

同

打ちも寝ず嵐の上の旅枕
みやこの夢にわたる心は　前中納言　定家

源重之集

千年ふるこつるの池もかはらねば
おやの齢を思ひこそやれ　源　致　親

同

千年をばひなにてのみや過すらむ
こつるの池どきゝて久しき　源為親

古今集

老いぬればさらぬ別れもありといへば
いよ〳〵見まくほしき君かな　伊豆内親王

同

世の中にさらぬ別れのなくもがな
千代もと祈る人の子の爲め　在原業平朝臣

新拾遺集

諸共に越えましものを死出の山
又おもふ人なき世なりせば

祝部成仲

同

君がためいとゞ別のをしきかな
かゝるうきめを見せじと思へば

女

新葉集

いかになほ涙をそへて分けわびむ
親にさき立つ道芝のつゆ

興良親王

同

我こそは荒き風をも防ぎしか
獨や苔の露拂はまし

中務卿宗良親王

明倫歌集

卷第三

夫婦歌

建速須佐之男命御詠 古事記

八雲立つ出雲八重垣妻こみに
やへ垣つくるその八重垣を

神武天皇御製

葦原のしけこき小屋に菅畳
いやさや敷きて我が二人寝し

讀人不知

萬葉集

難波人葦火焼く屋は煤したれど
おのが妻こそとこ珍しき

讀人不知

同

住の江の小集にいでゝうつゝにも
己妻すらを鏡と見つも

玉葉集

女郎花我がしめゆひし一本の
外に心はうつさゝらなむ

大納言長雅

詠千首

かさねこし妻だにあるを花衣
又こと色に心うつすな

權大納言 師兼

三草集

つゝましき新手枕の心をば
いもせの道の末も忘るな

少將源定信

萬葉集

おきていかば妹戀ひむかも敷妙の　田部忌寸櫟子
黑髮しきて長きこの夜を

同

我妹子は釧路にあらなむ左手の　振田向宿禰
わが奥の手に卷きていかましを

同

我が妻も繪にかきとらむ暇もが　物部古麿
旅ゆく我は見つゝ偲ばむ

同

石見のや高角山の木の間より　柿本人麿
我が振る袖を妹見つらむか

同

さゝの葉はみ山もさやにさわげども　同
我は妹おもふ別れ來ぬれば

同

吾妹子をいさみの山を高みかも　石上大臣麻呂
大和の見えぬ國遠みかも

萬葉集　軍王

山越の風を時じみぬる夜おちず
家なる妹をかけてしぬびつ

同　身人部王

大伴のみつの濱なる忘貝
家なる妹を忘れておもへや

同　讀人不知

防人に立ちしあさけのかなどでに
手放れ惜み泣きし子等はも

同　讀人不知

やみの夜のゆくさきしらずゆく我を
いつきまさむと問ひし子らはも

同　讀人不知

大君の命かしこみかなし妹が
手枕はなれ夜たち來ぬかも

同　物部龍

大君の命かしこみ出でくれば
我とりつきていひし子らはも

萬葉集

たちこものたちの騒ぎに相見てし　丈部與呂麿
妹が心は忘らせぬかも

同

防人に立たむさわぎに家の妹が　若舍人部廣足
なるべきこともいはず來ぬかも

同

霞みゐるふじの山方に吾來なば　讀人不知
いづち向きてか妹が歎かむ

同

植竹の本さへとよみ出でていなば　讀人不知
いづしむきてか妹が歎かむ

同

おの妻を人の里におきおほゝしく　讀人不知
見つゝぞ來ぬるこの道の間

同

潮まつとありける舟をしらずして　讀人不知
くやしく妹を別れ來にけり

萬葉集

筑紫路のかたの大島しましくも　壬生使主　大麿
見ねば戀しき妹を置きて來ぬ

同　笠朝臣金村

吾妹子がゆひてし紐を解かめやも
たえばたゆとも直に逢ふまでに

同　上毛野牛甘

難波路をゆきて來ませと我妹子が
つけし紐が緒絶えにけるかも

同　朝倉益人

吾妹子がしぬびにせよとつけし紐
糸になるとも我は解かじとよ

同　讀人不知

家の妹等わをしのぶらし眞結びに
ゆすびし紐の解くらく思へば

同　讀人不知

風の音の遠き我妹がきせし衣
袂のくだりまよひ來にけり

萬葉集

旅といへば眞旅になりぬ家の妹が
きせし衣の垢つきにけり　　占部虫麿

同

旅衣やつ重ねきていぬれども
猶膚寒し妹にしあらねば　　玉造部國忍

同

沫雪の庭に降りしき寒き夜を
手枕まかひひとりねむかも　　大伴宿禰家持

同

妹とありし時はあれども別れては
衣手寒きものにぞ有ける　　讀人不知

同

海原にうきねせむ夜は沖つ風
いたくな吹きそ妹もあらなくに　　讀人不知

同

ぬば玉の妹がほすべくあらなくに
我が衣手をぬれていかにせむ　　讀人不知

萬葉集

秋風は日にけに吹きぬ吾妹子は
いつとか我をいはひ待つらむ

讀人不知

同

家風は日に〳〵ふけど我妹子が
いへごともちて來る人もなし

丸子連大歳

同

蘆垣のくまどに立ちて我妹子が
袖もしほゝに泣きし偲はゆ

刑部直千國

同

春花のうつろふまでに相見ねば
月日よみつゝ妹待つらんぞ

大伴宿禰家持

同

我が妻はいたく戀らしのむ水に
かごさへ見えてよに忘られず

若倭部身麿

同

國々の社の神に幣まつり
あがこひすなむ妹がかなしさ

忍海部　五百麿

萬葉集

草枕旅に久しくあらめやと
妹にいひしを年の經ぬらむ　讀人不知

同

たらし姫御船泊てけむ松浦の海
妹が待つべき月は經につゝ　讀人不知

同

ぬば玉の夜わたる月にあらませば
家なる妹に逢ひて來ましを　讀人不知

同

足引の山飛びこゆる鴈がねは
都にゆかば妹に逢ひて來ぬ　讀人不知

同

常陸さしゆかむ鴈もがあが戀を
しるてつけて妹に知らせむ　物部道足

同

我が面の忘れもしたは筑波根を
ふりさけ見つゝ妹はしぬばね　占部小龍

萬葉集

筑波根の小百合の花の夜床にも　大舍人部　千文
かなしけ妹ぞひるしもかなしけ

同　讀人不知

妹が門いや遠そきぬ筑波山
かくれぬ程に袖はふりてな

同　讀人不知

遠くありて雲井に見ゆる妹が家に
早く至らむ恋ひ慰物

同　讀人不知

潮滿てば舟はやよそへ我が妻の
とこめづらしき行きてはや見む

同　若舍人部　廣足

難波津に御舟おろする八十檝貫き
今は漕ぎぬと妹に告げこそ

同　物部道足

押照るや難波の津より舟よそひ
あれはこぎぬと妹に告ぎこそ

拾遺集　笠金岡

波の上に見えし小島の島がくれ
行くうらもなし君にわかれて

古今集　在原業平朝臣

唐衣きつゝなれにし妻しあれば
はるゝばるゝきぬる旅をしぞ思ふ

萬葉集　柿本朝臣人麿

鴨山の岩根しまける我をかも
しらにと妹が待ちつゝあらむ

太平記　藤原武時

故郷に今宵ばかりの命とも
知らでや人の我を待つらむ

萬葉集　大伴宿禰家持

かくのみに有りけるものを妹も我も
千年のことも頼みたりける

同　同

昔こそよそにも見しか吾妹子が
おくつきとへばはしき佐保山

萬葉集

衾路を引手の山に妹を置きて
山路をゆけば生けりともなし

柿本朝臣　人麿

一條天皇御製
後拾遺集

野べまでに心一つはかよへども
わがみゆきとは知らずや有るらむ

萬葉集

秋山のもみぢあはれとうらぶれて
入りにし妹は待てど來ざりき

讀人不知

同

秋さらば見つゝしのべと妹が植ゑし
宿の撫子咲きにけるかも

大伴宿禰　家持

新古今集

女郎花見るに心はなぐさまで
いとゞむかしの秋ぞ戀しき

清慎公實頼

萬葉集

去年見てし秋の月夜はてらせれど
相見し妹はいや遠ざかる

柿本朝臣　人麿

後朱雀天皇御製

後拾遺集

去年の今日わかれし星もあひぬめり
などたぐひなき我身なるらむ

太宰帥大伴卿旅人

萬葉集

うつくしき人のまきてし敷妙の
吾が手枕をまく人あらめや

祝部成仲

風雅集

秋風の身にしむばかり悲しきは
妻なき床のねざめなりけり

大貳國章

拾遺集

思ひきや秋の夜風の寒けさに
妹なき床にひとりねむとは

讀人不知

萬葉集

現にとおもひてしかも夢のみに
袂まきぬと見ればすべなし

朱雀天皇御製

玉葉集

獨寢にありし昔のおもほえて
猶なき床を求めつるかな

千載集

思ひやれ空しき床を打拂ひ
昔をしのぶ袖の雫を

藤原基俊

六帖詠草

馴れ〳〵し昔にかへす夢さめて
空しき床に殘るおもかげ

小澤蘆庵

累葉集

妹戀ひて幾夜か寢れど夢にだに
見るたまなきの里ぞ悲しき

□□種世

新後拾遺集

行方なき玉のをぐしもかたみにて
猶そのかみを忘れわびぬる

前大納言 忠良

新拾遺集

今は我誰と共にかならぶべき
ふるき枕ぞ見るも悲しき

式部卿久明親王

萬葉集

家に行きていかにか我がせむ枕づく
妻屋淋しくおもほゆべしも

山上憶良

家集

妹が門いでいるごとにはや行きて　小野古道
はやかへり來といひし人はも

萬葉集

朝鳥の音のみやなかむ吾妹子に　高橋朝臣名闕
今又更にあふよしをなみ

同

吾妹子が植ゑし梅の木見るごとに　太宰帥大伴卿
心むせつゝ涙しぬる

同

妹が見し樗の花は散りぬべし　山上憶良
吾泣く涙未だひなくに

拾遺集

如何にせむしのぶの草も摘み侘びぬ　讀人不知
かたみと見えし子だになければ

家集

緑子を見れば涙の數そひて　伊藤維禎
ありし昔ぞいとゞ戀しき

常山詠草　贈大納言源光圀

池水につがはぬ鴛鴦の心をば
いまぞ我が身の上にしりぬる

家集　小野古道

我が後をたのみし人はさき立ちて
老いにける身をいかにしてまし

村上天皇御製　續後撰集

降るほどもなくてきえにし白雪は
人にはそへて悲しかりけり

後撰集　中納言兼輔

なき人のともにしかへる年ならば
暮れ行くけふは嬉しからまし

磐姫皇后　萬葉集

ありつゝも君をば待たむ打靡く
わが黑髪に霜のおくまでに

同　同

かくばかり戀ひつゝあらずば高山の
岩根しまきて死なましものを

日本紀

我がせこが來べきよひなりさゝがにの　衣通姫
蜘蛛のおこなひ今宵しるしも

光明皇后
萬葉集

我がせこと二人みませばいくばくか
此降る雪のうれしからまし

同

今更に何かおもはむ打靡き　安部女郎
心は君によりにしものを

萬葉集

我がせこは物なおもひそ事しあらば　同
火にも水にも我なけなくに

同

打日刺宮路を人は道ゆけど　讀人不知
我が思ふ人はたゞ一人のみ

同

敷島のやまとの國に人二人　同
ありとし思はゞ何かなげかむ

萬葉集

我が命惜しくはあらずさにづらふ　讀人不知
君によりては長く欲りする

同

大船の思ひ頼める君故に
つくす心はをしけくもなし

同

あり磯こえ外ゆく波のほか心
我はおもはじ命死ぬとも

同

同

黒髪の白髪までとむすびてし
心一つを今解かめやも

同

天雲のよりあひ遠みあはずとも
あだし手枕我はまかめや

同

さ寝ぬ夜は千夜もありとも我がせこが
思ひ悔ゆべきこゝろは持たじ

古今集　讀人不知

君をおきてあだし心を我が持たば
末の松山波も越えなむ

萬秋門院
新續古今集

かくて世にふるの高はし行末も
君をぞたえず頼みわたらむ

古今六帖　伊勢

蘆の屋のこやのしの屋の忍びにも
いな〳〵まろは人の妻なり

後撰集　平高遠妻

忘るなといふに流るゝ涙川
うき名をすゝぐ瀬ともならなむ

萬葉集　柿本朝臣人麿妻依羅娘子

な思ひそと君はいへども逢はむ時
いつと知りてか我が戀ひざらむ

同　柿本朝臣人麿妻

君が家にあれすみ坂の家路をも
我は忘れじ命死なずば

鏡女王

萬葉集

秋山の木の下がくれ行く水の
我こそ増さめ御思ひよりは

檜前舍人石前妻

同

枕太刀腰にとりはきまがなしき
せろがまき來むつくの知らなく

同

讀人不知

防人にゆくは誰がせととふ人を
見るかともしき物思ひもせず

同

あしべゆく鴈の翅を見るごとに
君がおはしゝなぐ矢し思ほゆ

同

あめつしの神にぬさおき齋ひつゝ
いませ我背なあれをし思はゞ

同

あさもよしきへゆく君がまつち山
待つらむ今日ぞ雨な降りそね

萬葉集

しなぬ路は今の墾道かりはねに　讀人不知
足ふましむな履はけ我が夫

古今集

我せこを都へやりて鹽竈の　同
まかきの島の待つぞ戀しき

同

風ふけば沖つ白波立田山　同
夜半にや君がひとり越ゆらむ

萬葉集

我夫子はいづくゆくらむおきつもの　當麻眞人人麿妻
なばりの山をけふか越ゆらむ

同

ながらふるつまふく風の寒き夜に　與謝女王
わが夫の君は獨か寢らむ

同

神風の伊勢の濱荻折りふせて　碁擅越妻
旅寢やすらむ荒き濱べに

阿閉皇女
萬葉集

これやこの大和にしては我が戀ふる
紀路に在りとふ名におふせの山

倭大后
同

人はよし思ひ止むとも玉かつら
かげに見えつゝ忘らえぬかも

依羅娘子
同

けふ〳〵と我が待つ君は石川の
貝に交りてありと言はずやも

讀人不知
詞花集

をり〳〵のつらさを何に歎きけむ
やがてなき世も有りはありけり

上東門院
千載集

一聲も君に告げなむ時鳥
このさみだれはやみにまよふと

同
新古今集

逢ふことも今はなきねの夢ならで
いつかは君を又は見るべき

待賢門院

新葉集

九重の玉の臺も夢なれや
苔の下にし君をおもへば

源頼時女

新千載集

先立たじおくれじとこそ思ひしか
契りしかひもなき別れかな

時望朝臣妻

後撰集

別れにしほどをはてとも思ほえず
戀しきことの限りなければ

後拾遺集

別れにし人は來べくもあらなくに
いかにふるまふさゝがにぞ此は

土御門右大臣師房女

同

別れにしその日ばかりは廻り來て
今もかへらぬ人ぞ戀しき

伊勢大輔

詞花集

去年の春散りにし花も咲きにけり
あはれ別れのかゝらましかば

赤染衛門

萬代集

見ても猶袖ぞぬれぬる亡き人の
かたみと偲ぶ水茎の跡

盛方妻

同贈答歌

豐玉毘賣命御詠
古事記

赤玉は緒さへ光れど白玉の
君がよそひし貴くありけり

彦火々出見命御詠
古事記

沖つ鳥鴨つく島に我がゐねし妹は
忘れじよのことごとも

作者不知

萬葉集

かくのみに有りけるものを猪名川の
沖をふかめて我がもへりける

妻

同

ぬば玉の黑髪ぬれて沫雪の
ふるにや來ますこゝだ戀ふれば

萬葉集

高橋連黑人

吾妹子に猪名野は見せつなつき山
つぬの松原いつか示さむ

同

いざ子ども大和へはやく白菅の
眞野の榛原手折りてゆかむ

妻

同

白菅の眞野の榛原ゆくさくさ
君こそ見らめ眞野の榛原

同

黑人

妹も我も一つなるかも三河なる
ふたみの道ゆ別れかねつる

妻

同

三河のふたみの道ゆ別れなば
わがせも我もひとりかも行かむ

防人 名闕

同

いきていかば妹はまかなし持ちてゆく
梓の弓のゆづるにもがも

萬葉集

遅れ居てこひは苦しも朝かりの　妻
君が弓にもならましものを

遣新羅使人　妻

同

武庫の浦の入江のすとりはぐゝもる
君を放れて戀に死ぬべし

使人

同

大舟に妹乘るものにあらませば
はぐゝみ持ちてゆかましものを

同

君がゆく海べのやどに霧立たば　妻
あが立ちなげく息と知りませ

使人

同

秋さらばあひ見むものを何しかも
霧に立つべく歎きしまさむ

妻

同

大ふねをあるみに出しいます君
つゝむことなく早かへりませ

萬葉集

まさきくて妹がいはゝば沖つ波　使人
千重に立つとも障りあらめやも

同

別れなばうらかなしけむあが衣　妻
下にを着ませたゞに逢ふ迄に

同

吾妹子が下にも着よとおくりたる　使人
衣の紐を我れとめかやも

同

吾が故におもひなやせそ秋風の　使人
ふかむその月あはむものを故

同

栲衾新羅へいます君がめを　妻
今日かあすかといはひて待たむ

同

はろ〳〵におもほゆるかも然れども　妻
けしき心をあが思はなくに

萬葉集

我がゆきのいきつきしかば足柄の　服部於田
峰はふ雲を見とゝしぬばね

同　妻服部皆女

我がせなを筑紫へやりてうつくしみ
帶は解かなゝあやにかも寢も

同　藤原部等母麿

足柄のみ坂にたして袖ふらば
家なる妹はさやに見もかも

同　妻物部刀自賣

色深くせなが衣は染めましを
み坂たはらばまさやかに見む

同　物部歳德

白玉を手に執り持ちてみるのすも
家なる妹を又見てもゝや

同　妻椋椅部刀自賣

草枕旅ゆく君が丸寢せば
いはなる妹は紐とかず寢む

萬葉集

間なく戀ふれにかあらむ草枕
旅なる君が夢にし見ゆる　東人妻

同

草枕旅に久しくなりぬれば
猶こそ思へな戀ひそわぎも　佐伯宿禰東人

後京極院
新葉集

思ひやれ塵のみつもる四つの緒に
拂ひもあへずかゝる涙を

後醍醐天皇御製

涙ゆゑ半の月はくもるとも
馴れて見し夜の影はわすれじ　文貞公

同

里の蜑がしほなれ衣忍べとて
辛き別れのかたみにぞやる　妙光寺内大臣母

同

里の蜑が鹽なれ衣とゞめても
ながらへばこそ形見にもせめ

文貞公

新葉集
海山を見る空もなし我が心
さながら君にそへて來しかば

妙光寺内大臣母

同
めぐりあふ契ならずば中々に
うきを見はてぬ命ともがな

贈太皇大后宮

新千載集
あふ事の限りのたびの別れには
しでの山路ぞ露けかるべき

村上天皇御製

新千載集
君のみや露けかるべき死出の山
おくれじとおもふわが袖を見よ

明倫歌集

卷第四

兄弟歌

前大納言　光頼

玉葉集

古もたぐひもあらじ我が宿に
枝をつらぬる柏木のかげ

新拾遺集　太宰大貳　重家

武藏野の若紫の衣手は
ゆかりまでこそ嬉しかりけれ

二品法親王尊胤

新千載集　軒近き竹の園生のよゝの風
つらなる枝に吹きぞ傳へむ

常山詠草　贈大納言源光圀

數ふれば君が齡のたかまつや
つらなる枝も千代に傳はむ

東歌　伊勢の海清き渚に拾ふてふ　橘枝直
かひある千代は君ぞ數へむ

續古今集　今日ぞ思ふ君にあはでやみなまし　入道兵部卿昭平親王
八十路あまりの齡ならずば

日本紀　山城の筒木の原に物申す　國依姫
我がせを見れば涙ぐましも

萬葉集

大來皇女

我がせこを大和へやると小夜更けて
あかつき露に我が立ちぬれし

同

二人ゆけど行き過ぎがたき秋山を
いかでか君が一人越ゆらむ

同

大伴田村大嬢

よそに居て戀ふれば苦しわぎも子を
戀ひて逢ひ見む事は如何にせむ

同

遠からばわびてもあらむを里近く
ありときゝつゝ見ぬがすべなさ

同

白雲のたな引く山の高々に
我が思ふ妹を見むよしもがも

同

いかならむ時にか妹を葎生の
いやしき宿に入りまさしめむ

大伴田村大嬢

萬葉集

我が宿の萩が花咲く夕かげに
今もみてしが妹がすがたを

同

沫雪の消ぬべきものを今までに
ながらへぬるは妹に逢はむとぞ

同

長皇子

丹生の川瀬はわたらずてゆく〳〵と
聽ひ籠むわがせいで通ひ來ね

大來皇女

同

神風の伊勢の國にもあらましを
何しか來けむ君もあらなくに

同

見まくほり我がする君もあらなくに
何しか來けむ馬疲らしに

同

うつそみの人なる我や明日よりは
二上山を妹背と我が見む

萬葉集

磯の上に生ふるあしびを手折らめど　大來皇女
見すべき君が在りといはなくに

同

かゝらむと兼て知りせば越の海の　大伴宿禰家持
ありその浪も見せましものを

同

神山の山べまそ木綿みじか木綿　高市皇子
かくのみからに長くと思ひき

古今集

泣く涙雨とふらなむ渡川　小野篁朝臣
水まさりなばかへりくるがに

續古今集

誰も皆消えのこるべき身ならねど　儀同三司 伊周
行きかくれぬる君ぞ悲しき

同

はかなさは世の常とても慰めつ　道命法師
戀しきをこそ忍びわびぬれ

續後拾遺集

目の前につらなる枝もかれゆくを
かゝる朽木のなど殘るらむ

前關白 基忠

新拾遺集

思へたゞつらねし枝は朽ちはてゝ
頼むかげなくなれる歎きを

按察使實繼

悼式部親王文

連れる枝と頼みしひとかたの
朽つる木かげを哀れとも見よ

良恕親王

續拾遺集

あだに散る花によそへてなき人を
思へば落つる我が涙かな

普光院關白左大臣實實

悼妹文

咲く梅の梢を見ても思ひ出
つらなる枝の枯れし名殘を

九條攝政左大臣道房

玉葉集

春しらぬうき身もつらし古に
つらねし枝の花に別れて

從一位兼敎

後撰集

春の夜の夢の中にも思ひきや
君なき宿をゆきて見むとは

貞信公 忠平

新葉集

數ならぬ歎になきて我はたゞ
かへりわびたる雁の一つら

中務卿宗良親王

伏見天皇御製

風雅集

遲れてもかつがついつまでと身をぞ思ふ
つらに別るゝ秋の雁がね

常山詠草

理に過ぎてぞぬるゝ藤衣
われもゆかりの色にもれねば

贈大納言源光圀

六帖詠草

春日野のはらからこそは世の中の
うきたの森の歎をもとへ

小澤蘆庵

三草集

埋火のあたり長閑にはらからの
まどゐせし世ぞ戀しかりける

少將源定信

同贈答歌

元明天皇御製
萬葉集

丈夫の鞆の音すなり武士の
大まへつぎみ楯立つらしも

御名部皇女

同

我が大君物なおもほし皇神の
つぎてたまへる我なけなくに

眞信公 忠平

續後撰集

折りて見るかひもあるかな梅の花

同

埋木に花さく春のなかりせば
まがき枝も誰か折らまし

桃園左大臣仲平

後醍醐天皇御製
新千載集

待たれつる心開けておそ櫻
匂ひ久しき色ぞことなる

達智門院

同

今ぞげに心開けて君が代に
花もかひある色を添へける

金葉集　行末のためしと今日をおもふとも　今いくとせか人に語らむ　權僧正永緣

同　幾年も君ぞ語らむつもりゐて　おもしろかりし花のみゆきを　内侍

常山詠草　春といへば先づ咲く庭の梅が香を　源頼雄朝臣

常山詠草　千代の春かけて霞をくみて見む　つらなる枝の花のさかづき　贈大納言源光國

續古今集　君さそふしるべにぞやる鶯も　來ゐる軒ばの梅の匂ひを　龜山天皇御製

同　思ひやる心を風の便りにて　たがなほざりの梅の匂ひぞ　月花門院

新後撰集
こひしさの身より餘れる思をば　平親清女妹

夜半の螢によそへても見よ

同
我は又晝の思のきえばこそ　平親清女

夜はの螢に身をもたぐへめ

續後撰集
はぐゝみし昔の袖のこひしさに　權大納言長家

花橘の香をしたひつゝ

上東門院
橘の匂ばかりもかよひ來ば　源兼俊母

今も昔のかげは見てまし

同
後拾遺集
匂ひきや都の花は東路の　康資王母

東風のかへしの風につけしは

同
吹きかへすこちのかへしは身にしみき　

都の花のしるべとおもふに

玉葉集

法性寺入道前關白家三河

言の葉の露ばかりだに懸けよかし
草のゆかりの數ならずとも

同

二條院讃岐

紫の色に出でてはいはねども
草のゆかりを忘れやはする

萬葉集

大伴宿禰家持妹

山吹の花とりもちてつれもなく
かれにし妹を思ひつるかも

同

家持代妻

妹に似る草と見しより我がしめし
野べの山吹誰れか手折りし

同

家持代妻

つれもなく枯れにしものと人はいへど
あはぬ日まねみ思ひぞ我が爲る

同

大伴田村大嬢

我が宿の秋の萩が花咲く夕かげに
今もみてしが妹が姿を

萬葉集

我が宿にもみづるかへで見るごとに
妹をかけつゝ戀ひぬ日はなし

坂上大嬢

櫻雲記

足乳根の守りをそふる三芳野の
山をはいづち立ちはなるらむ

中務卿宗良親王

後村上天皇御製
同

ふるさとゝなりしに山は出づれど
親の守りはなほもあらなむ

後村上天皇御製
新葉集

年をふるひなの住居の秋はあれど
月は都と思ひやらなむ

中務卿宗良親王

新葉集

いかにせむ月も都と光そふ
君すみのえの秋のゆかしさ

後村上天皇御製
同

廻り逢はむ頼みぞしらぬ命だに
あらばと思ふ程のはかなさ

中務卿宗良親王

同

廻り逢はむたのみあるべき君が代に
獨老いぬる身をいかにせむ

□□景雄

累葉集

いかに猶あかしわぶらむ旅ならぬ
ふるさとさへも冴ゆる霜夜を

□□信常

同

思ひやれふるさとさへもさゆる夜に
嵐吹きそふ旅のねざめを

□□通直女

同

いざといふ人を便にいづくまで
姉はの松のいなむとすらむ

姉

同

風の音はたえず聞えむ雲井にも
姉はの松のあらむ限りは

太皇太后宮

千載集

この本にかき集めたることのはを
別れし時のかたみとぞ見る

千載集
このもとにかくことのみを見るたびに
頼みしかげのなきぞ悲しき　權大納言　實家

永福門院新千載集
かつ〳〵に片枝枯れぬる一つ松
いつまでとてか朽ち殘るらむ　前大僧正　道意

同
朽ち殘る一木の松の蔭をこそ
かれゆく枝も猶頼みけれ

明倫歌集

卷第五

朋友歌

萬葉集
新しき年の始めに思ふどち
いむれて居ればなれば樂しくもあるか　大膳大夫道祖王

風雅集

新しき年の始めの嬉しきは
ふるき人どもあへるなりけり

中納言兼輔

詞花集

萬代のためしに君がひかるれば
子の日の松もうらやみやせむ

赤染衛門

萬葉集

盃に梅の花うけておもふどち
飲みての後は散りぬともよし

大伴坂上郎女

後撰集

梅の花今は盛になりぬらむ
たのめし人のおとづれもせぬ

兵部卿敦固親王

萬葉集

鶯のなき散らすらむ春の花
いつしか君と手折りかざさむ

大伴宿禰家持

同

しなさかる越の君らとかくしこそ
柳かつらぎ樂しく遊ばめ

同

萬葉集

おく山の八つをの椿つばらかに
今日はくらさね大丈夫の友

大伴宿禰家持

同

春日野の淺茅が上におもふどち
遊べるけふは忘らえめやも

作者不知

同

春の野に心やらむとおもふどち
來しし今日はくれずもあらぬか

同

古今集

思ふどち春の山べに打ちむれて
そこともいはず旅寢してしが

素性法師

萬葉集

山峽に咲ける櫻をたゞひとめ
君に見せてば何をか思はむ

大伴宿禰 池主

同

櫻花今ぞ盛りと人はいへど
我はさぶしも君としあらねば

同

讀人不知

續後拾遺集
飽かずとも今日はかへりて山櫻
花盛をや人に告げまし

平兼盛

拾遺集
世の中に嬉しきものはおもふどち
花見て暮すこゝろなりけり

凡河内躬恒

古今集
我が宿の花見がてらに來る人は
散りなむ後ぞ戀しかるべき

中原師尚朝臣

新後撰集
花見むと契りし人をまつほどに
あやなく春の暮れにける哉

平親世

同
散りはてゝ後は何せむ山里の
花見よとてぞ人は待たれし

平春海

琴後集
見せばやと人をぞ忍ぶ山櫻
あかぬ心の隔てなければ

鳳山詠草

稀人を花も待ちえてよろこびの
色を添へつゝさき匂ふらむ

樓中納言源綱條

後撰集

我が宿の花にな鳴きそ呼子鳥
よぶかひありて君も來なくに

春道列樹

萬葉集

唐人も船をうかべて遊ぶとふ
けふぞわがせこ花髮せよ

大伴宿禰　家持

後撰集

春日さす藤の裏葉のうらとけて
君し思はゞ我もたのまむ

讀人不知

常山詠草

紫の朱を奪ひて咲く藤の
ゆかりへだてぬ春の友垣

贈大納言源光圀

萬葉集

山吹の花のさかりにかくのごと
君を見まくは千年にもがも

大伴宿禰　家持

後撰集
白妙に匂ふ垣根の卯の花の　讀人不知
うくも來てとふ人のなき哉

玉葉集
松がねのいはたの岸の夕涼み　西行法師
君があれなと思ほゆるかな

拾遺集
相見ずて一日も君にならはねば　紀貫之
棚機よりも我ぞまされる

萬葉集
女郎花咲きたる野べをゆきめぐり　大伴宿禰池主
君を思ひてたもとほり來ぬ

家集
君一人とひ來ぬからに我が宿の　源宗行朝臣
道も露けくなりにける哉

萬葉集
鶉鳴くふりにし里の秋萩を　豐浦寺尼
思ふ人どち相見つるかも

萬葉集

紅葉の過ぎまくをしみ思ふどち
遊ぶ今宵はあけずもあらなむ

大伴宿禰家持

家集

諸共に君と見ぬまの紅葉は
心のやみの錦なりけり

前大納言實國

萬葉集

我が宿の君まつの木にふる雪の
ゆきにはゆかじ待ちにしまたむ

作者不知

古今集

君をのみ思ひ越路の白山は
いつかは雪の消ゆる時ある

宗岳大頼

常山詠草

白雪のふりし昔の友ならで
誰れか訪はましみ山べの里

贈大納言源光圀

新拾遺集

とふ人の情のふかき程までは
つもりもやらぬ庭の白雪

夢窓國師

古今集

我が待たぬ年は來ぬれど冬草の
かれにし人は音信もせぬ

凡河内躬恒

常山詠草

立つ波も心へだてぬ友千鳥
まなくしばなく聲かはすなり

贈大納言源光國

家集

都には君をのみこそ思ひ出づれ
紅葉の折も花のさかりも

橘爲仲朝臣

拾遺集

一節に千代をこめたる杖なれば
つくともつきじ君が齡は

大中臣頼基

同

千年經む君しいませばすべらぎの
天の下こそうしろ安けれ

參議好古

續千載集

露のごとはかなき身をば置きながら
君が千年を祈りやるかな

藤原高光

萬葉集

年月はあらたゝにあひ見れど　民部少丞大伴宿禰村上
吾が思ふ君は飽き足らぬかも

同

をとつ日も昨日もけふも見つれども　橘宿禰文成
明日さへ見まくほしき君かも

同

足引の山に生ひたる菅の根の　金明軍
ねもごろ見まくほしきかも

同

鶏鳥の息長川は絶えぬとも　筑前椽門部連石足
君に語らむ事盡きめやも

古今集

思ふどちまとゐせるよは唐錦　讀人不知
たゝまく惜しきものにぞ有りける

萬葉集

み崎廻のありそによする五百重波　筑前椽門部連石足
立ちてもゐてもわが思へる君

萬葉集

燒太刀のかど打ち放つ大丈夫が　湯原王
ほぐ豐御酒に我れ醉ひにけり

同

君が爲め釀みし待酒やすの野に　太宰帥大伴卿旅人
獨やのまむ友なしにして

同

風高く邊には吹けれど妹がため　紀女郎
袖さへぬれて刈れる玉藻そ

同

死にも生きも同じ心と結びてし　作者不知
友や違はむ我もよりなむ

萬葉集

何せむに違ひはをらむいなも諾も　作者不知
友のなみ〳〵我もよりなむ

後撰集

我も思ふ人も忘るなありそ海の　拘子内親王
浦吹く風の止む時もなく

土佐日記
棹させどそこひも知らぬわたづみの
深きこゝろを君に見るかな　紀貫之

後拾遺集
陸奥のあだちの眞弓引くやとて
君に我が身を任せつるかな　源重之

新千載集
問はれずば獨み山の月影を
眺しとだにも愛れと嘆かも　狛秀房

詞花集
ながらへば思ひ出にせむ思ひ出よ
君とみかさの山の月影　琳賢法師

後拾遺集
都には誰をか君はおもひ出づる
都の人は君を戀ふめり　大江匡衡朝臣

玉葉集
君だにも都なりせば思ふこと
先づ語らひて慰みなまし　増基法師

自歌合

思ふこと我に均しき友もがな　　中原遠忠

言ひ合せつゝ世を過さまし

萬葉集

唐國に行き足らはして歸り來む　　多治比眞人鷹主

丈夫猛夫に御酒奉る

同

天地の神も助けよ草枕　　作者不知

旅ゆく君が家に至るまで

同

玉矛の道の神たちまひはせむ　　大伴宿禰　池主

我おもふ君をなつかしみせよ

同

我せこは玉にもがもな手にまきて　　大伴宿禰　家持

見つゝ行かむを置きていかば惜し

同

君が行もし久ならば梅柳　　同

誰れと共にか我が鬘かむ

萬葉集

いはせ野に秋萩凌ぎ馬並べて
初鳥狩だにせでや別れむ　大伴宿禰家持

同

遅れ居て我はやこひむ春霞
棚引く山を君がこえいなば　作者不知

同

我が背子が國へましなば時鳥
鳴かむ五月はさびしけむかも　内藏忌寸　繩麿

同

眞寸鏡見あかぬ君におくれてや
朝夕にさびつゝ居らむ　沙彌滿誓

同

大伴のみつの松原かきわけて
我が立ちまたむはや歸りませ　山上憶良

同

波の上見ゆる小島の雲がくり
あな息づかし相別れなば　笠朝臣金村

萬葉集

國々の防人つどひ船のりて
わかるを見ればいともすべなし

神麻續部島麿

同

梳も見じ屋内もはかじ草枕
旅ゆく君をいはふと思ひて

作者不知

古今集

思へども身をしわけねば目に見えぬ
心を君にたぐへてぞやる

伊香子淳行

同

雲井にもかよふ心のおくれねば
別ると人に見ゆばかりなり

清原深養父

同

白雲の八重にかさなる遠方にても
思はむ人にこゝろ隔つな

紀貫之

同

限りなき雲井のよそに別るとも
人を心におくらさむやは

讀人不知

古今集
別るれば程をへだつと思へばや
且見ながらにかねて戀しき　在原滋春

後撰集
身をわくることのかたさにます鏡
かげ計をぞ君にそへつる　大窪則善

拾遺集
東路の草葉を分くる人よりも
おくるゝ袖ぞ露けかりける　女藏人參河

後拾遺集
別れゆく船はつなぐにまかすれど
心は君がかたにこそ引け　藤原孝善

金葉集
さし上る旭に君を思ひ出でむ
かたぶく月に我を忘るな　中納言通俊

詞花集
二つなき心を君にとゞめ置きて
我さへ我にわかれぬるかな　僧都清胤

新古今集

遙々と君がわくべき白波を
あやしやとまる袖にかけつる

俊惠法師

新勅撰集

東路の野路の草葉の露繁み
行くもとまるも袖ぞしをるゝ

禎子内親王家攝津

續古今集

色々に思ふ心を染めてこそ
君が手向の幣となしつれ

大中臣能宣朝臣

同

一日だに見ねば戀しき君が去なば
年の四とせをいかゞくらさむ

凡河内躬恒

風雅集

遠くゆく君をおくるとおもひやる
心も共に旅ねをやせむ

紀貫之

句題和歌

東路に隔てはつとも武藏鐙
ふみたがふなと思ひてぞやる

大江千里

月詣集

今ぞしる心つくしは君が爲
惜むあまりの名にこそ有りけれ

参河内侍

六帖詠草拾遺

諸共に老いにけるかな大丈夫が
別れにかくや袖しぼるべき

小澤蘆庵

家集

能く行きてよくかへり來てたらちねの
かはらの御前御前はや拜み給へ

賀茂眞淵

萬葉集

草枕旅行く君をうつくしみ
たぐへてぞ來し志賀の濱べに

大伴宿禰百代

同

堀江越え遠き里までおくりける
君が心は忘らゆまじも

藤原朝臣執弓

漫吟集

別れ來て友をおもへば馴れ〳〵て
したしき程は疎きなりけり

阿闍梨契沖

後拾遺集

逢坂の關打越ゆるほどもなく　藤原維規
けさは都の人ぞ戀しき

萬葉集

難波津に御船はてぬときこえこば　山上憶良
紐ときさけて立ち走りせむ

同

去年の秋あひみしまゝにけふ見れば　久米朝臣廣縄
おもやめづらし都びの人

累葉集

本つ人名乘聞かずば諸共に　□□朝利
しらぬ翁と見てや過ぎまし

古今集

明日しらぬ我身とおもへど暮れぬまの　紀貫之
けふは人こそ悲しかりけれ

同

時しもあれ秋しも人に別るべき　壬生忠岑
あるを見るだに戀しきものを

萬葉集

見れど飽かずいましゝ君が紅葉の　内禮正縣犬養宿禰人上
うつりいぬれば悲しくもあるか

同

いはた野に宿りする君家人の　作者不知
いづらと我をとはゞいかにせむ

同

いつしかと待つらむ妹に玉づさの　大伴宿禰三中
ことだにつげずいにし君かも

同

百足らず八十の隈路に手向けせば　刑部垂麿
過ぎにし人に蓋し逢はむかも

古今集

君まさで烟たえにし鹽がまの　紀貫之
うらさびしくも見え渡るかな

後撰集

時鳥けさ鳴く聲におどろけば　同
君にわかれし時にぞありける

後撰集
植ゑ置きし二葉の松はありながら
君が千年のなきぞかなしき　紀貫之

後拾遺集
君が植ゑし松ばかりこそ殘りけれ
いづれの春の子日なりけむ　源爲善朝臣

古今集
君が植ゑし一むら薄虫の音の
茂き野べともなりにけるかな　三春有佐

後撰集
君がいにし方やいづこぞ白雲の
ぬしなき宿と見るぞ悲しき　藤原清正

詞花集
夢ならで又も逢ふべき君ならば
ねられぬ寐をも歎かざらまし　藤原相如

續古今集
馴れし世の友だにもなし古の
見えつる夢を誰に語らむ　式部卿邦省親王

玉葉集

船岡の裾野の塚の數そへて
昔の人に君をなしつる

西行法師

新葉集

同じくば共に見し世の人もがな
戀しさをだに語り合せむ

中務卿宗良親王

累葉集

友千鳥おくるゝあとに思ひ出づる
いつはと時はわかの浦波

□□二夫

同

此ほどの寐覺の命親なしに
ふすらむ床の涙いかにぞ

□□信常

同

おもひ出づやねられぬ床につく〳〵と
枕かはせし夜々のなさけを

同

金葉集

昔見しあるじがほにも梅が枝の
花だに我に物語せよ

藤原基俊

續千載集
住みすてし人は昔になりはてゝ
花に跡とふ宿ぞふりぬる　藤原業尹

新古今集
玉の緒の長きためしに引く人も
きゆれば露にことならぬ哉　權大納言長家

玉葉集
春の花秋の紅葉を見し友の
年は昔の下に朽ちぬる　權中納言俊忠朝臣

新勅撰集
打むれて尋ぬる宿は昔にて
面影のみぞあるじがほなる　覺盛法師

玉葉集
見しほどの昔をだにも語るべき
友もなき世になりにけるかな　藤原則俊朝臣

新後拾遺集
せめて今いひてなぐさむ友もがな
心に餘るむかしがたりを　西園寺前内大臣女

拾遺愚草
年月はきのふばかりの心地して
見馴れし友のなきぞ多かる
權中納言 定家

新葉集
故郷に立歸るとも今は世に
昔を語る友や無からむ
大藏卿在仲

家集
語るべき友さへ稀になるまゝに
いとゞ昔の偲ばるゝかな
兼好法師

家集
思ふ人あらば嬉しき身ならまし
ありのすさびはある世ながらに
賀茂眞淵

漫吟集
今は世に心ひとしき友もなし
美しきは松のむら立
阿閣梨契冲

正木葛
今は世に語り合さむ友ぞなき
我のみ知りて忍ぶ昔を
藤原齋世

同贈答歌

太宰帥大伴卿族人

萬葉集

龍の馬も今も得てしが青によし
奈良の都に行いて來むため

同　山上憶良

龍の馬を吾は求めむ青によし
奈良の都に來む人のため

同　太宰少貳石川朝臣足人

さす竹の大宮人の家とすむ
佐保の山べを思ふやも君

同　太宰帥　大伴卿

やすみしゝ我が大君のみけつ國は
大和もこゝも同じとぞ思ふ

同　大伴宿禰　家持

心ぐゝおもほゆるかも春霞
たなびく時にことしかよへば

萬葉集　藤原朝臣久須麻

奥山のいはかげに生ふる菅の根の
ねもごろ我も相思はざれや

同　置始連長谷

山吹は撫でつゝ生さむありつゝも
君來ましつゝかざしたりけり

同　大伴宿禰家持

我が背子が宿の山吹咲きてあらば
止まずかよはむいや年のはに

同　巨勢橘對馬

長門なる沖つかり島おくまへて
我が思ふ君は千年にもがも

同　橘右大臣

おくまへて我を思へるわがせこが
千年五百年ありこせぬかも

家集　源信明

あたらよの月と花とを同じくば
あはれ知られむ人に見せばや

信明集

君ならで誰にか見せむ梅の花　紀友則
色をも香をも知る人ぞしる

拾遺愚草

吳竹にこづたふ鳥の枝うつり　左衛門督　隆房
嬉しきふしも友にこそよれ

同

百千鳥こづたふ竹のよのほども　中納言定家
ともに交見しふしぞ嬉しき

月清集

後京極攝政前太政大臣良經

つれなくば君もやとふと思ひつる
けさの雪にも遂にまけぬる

同

我が宿の庭のあとにもつれなくて　中納言定家
とはむ心の深さをぞ知る

後撰集

玉くしげ二年あはぬ君が身を　源公忠朝臣
あけながらやはあらむと思ひし

後撰集

あけながら年ふることは玉くしげ
身の徒らになればなりけり　小野好古朝臣

同

思ひきや君が衣をぬぎかへて
こき紫の色に見むとは　九條右大臣師輔

同

古へも契りてけりな打はぶき
飛び辺ちのできむの神を　庶明朝臣

古今集

沖つ波高師の濱の濱松の
名にこそ君を待ちわたりつれ　紀貫之

同

君を思ひおきつの濱に鳴く鶴の
尋ねくれば〻ありとだに聞く　藤原忠房

拾遺集

いかばかりおもふらむとか思ふらむ
老いて別るゝ遠きわかれを　清原元輔朝臣

拾遺集

君はよし行末遠しとまる身の
待つ程いかゞあらむとすらむ

源満仲朝臣

續古今集

行きめぐり相見まほしき別れには
命も共に惜まるゝかな

小野宮右大臣實資

同

君が代の遙に見ゆる旅なれば
いのりてぞゆく住の松原

太宰大貳　高遠

新千載集

妹背川かへらぬ水の別れ路は
きゝわたるにも袖ぞ濡れける

清輔朝臣

同

聞きわたる袖だに濡るゝ中河の
水の心をくみて知らなむ

後德大寺左大臣實定

明倫歌集

卷第六

神祇歌

後宇多天皇御製
風雅集

天つ神國つ社を齋ひてぞ
我が葦原の國は治まる

後村上天皇御製

新葉集

行末を思ふも久し天つ社(やしろ)
國つ社のあらむかぎりは

皇太后宮太夫俊成

家集

明けき雲の上をば萬代(よろづよ)と
天つ社も照しますらむ

後西園寺入道前太政大臣實兼

風雅集

天つ神國つ社と分れても
賊をうくる道はかはらじ

春葉集

誰が爲と誰か思はむ世を守る
天つ社も國つやしろも

荷田東麿

雲錦集

夜の守り晝の守りと天つ神
國つ社や鎮めましけむ

賀茂季鷹

新拾遺集

思ひかねたばかりごとをせざりせば
天の岩戸は開けざらまし

阿保經覽

日本紀竟宴歌

常闇も樂しき御代となりけるは
天手力男たすけありけり

阿刀宿禰 春正

後醍醐天皇御製
新千載集

天の戸のあけし月日もかはらぬは
神代ながらの光なりけり

前參議爲長

續拾遺集

明らけき御代の初めの朝日山
天照る神の光さしそよ

風雅集

岩戸出でし日かげは今も曇らねば
かしこき御代をさぞ照すらむ

山階入道前大臣實雄

金葉集

曇りなく豐さか上る朝日には
君ぞ仕へむ萬代迄に

源俊頼朝臣

花園天皇御製
風雅集

神風にみだれし塵もをさまりぬ
天照す日の明らけき世は

後宇多天皇御製
風雅集
とこやみを照らすみかげの變らぬは
今もかしこき月讀の神

千載集
月讀の神し照さば天雲の
かゝる憂世もはれざらめやも

大中臣爲定朝臣

雪玉集
目に見えぬものとはいはじ明くれの
月日ぞもとの神の光を

道遙院内大臣實隆

新葉集
神路山出づる朝日や君が代を
よるひる守る光なるらむ

右兵衛督 成直

後村上天皇御製
同
九重に今もますみの鏡こそ
猶世を照らす光なりけれ

風雅集
九重に天照る神のかげをうけて
うつす鏡は今もくもらじ

中園入道前大政大臣公賢

風雅集

天照すみかげをうつすます鏡
傳はれる代の曇あらめや

權大納言 公陰

新續古今集

曇なき君が心の鏡にぞ
天(あま)てる神はかげやどしける

大納言師賢

新拾遺集

曇なき八咫の鏡や岩戸あけし
天照神の光なるらむ

大江廣秀

玉鉾百首

常(とこし)へに世をてらしまする日の御(み)靈
つけし鏡は伊勢の大神

平宣長

達智門院

新續古今集

神風や二つの宮の宮柱
一つ心に世を守るらし

參議源治紀

鶴山詠草

天照す内外の神もへだてなく
曇らぬ君が御代守るらし

新古今集

神風や五十鈴の川の宮柱　皇大后宮大夫俊成
いく千代すめと立てはじめけむ

正木葛

五十鈴川清き流の末までも　青木定信
すめるや神の心なるらむ

春葉集

大君を幸くといはふ折鈴の　荷田東麿
いすゞの宮を誰かあふがぬ

日本紀竟宴歌

保食の神の力は五くさの　大中臣安則
たなつものをぞ身よりなしける

同

五くさの田なつ物をば保食の　兵部大輔由道
神ぞなしける萬代のため

同

くゝのちの産み施せる色々の　源朝臣公輔
木こそ都のさかりなりけれ

日本紀竟宴歌

年毎の春や昔のかやの姫
野にも山にも草のもゆらむ

平朝臣清章

夫木抄

神こそは野をも山をも作りおけ
人に眞(まこと)の道をふめとて

後九條内大臣基家

後醍醐天皇御製

續後拾遺集

皆人の心もみがけ千早振る
神の鏡のくもる時なく

玉葉集

曇なく今もますみの鏡とは
天照る空の日影にも知れ

荒木田經顯

衆妙集

大方は鏡を見ても思ひ知れ
空に曇らぬ神の心を

源藤孝

壬二集

何事も夢とのみ見る世の中に
神のまことぞ現(うつつ)なりける

従二位家隆

外宮北御門歌合

瑞垣のそともの宮居ふりぬれど
神の惠ぞ猶あらたなる

藤原家業

新後拾遺集

君が代に二たびかざす葵草
神の惠もかさねてぞ知る

讀人不知

心珠詠草

安からぬうき身ながらも世にすめば
神の惠にいかでもるべき

三光院内大臣實枝

玉鉾百首

天地の神の惠しなかりせば
一日一夜もありえてましや

平宣長

詠百首和歌

日本は神のみ國ときくからに
いますが如く賴むとをしれ

神主康業

新續古今集

道しあれば猶賴むかな僞を
たゝすの杜の神にまかせて

大江茂重

千首和歌

理をたゞすの神にねぎかけて
猶さりともと世を頼むかな　中務卿宗良親王

廣田社歌合

白玉のまさごの數にあらねども
惠ひろたの名を頼むかな　藤原隆信朝臣

後醍醐天皇御製
新拾遺集

九重の櫻かざしてけふは又
神に仕ふる春の上人

新拾遺集

長閑なる春の祭の花鎭め
風をさまれと猶いのるらし　關白前左大臣基平

家集

祈りつゝ神の惠にまかせつる
苗代水はいつも絶えせじ　橘爲仲

續千載集

天皇の天のみおやの詔
つたへていのるとよの宮人　度會行忠

家集

貴きや天皇は神ながら
神をまつらすけふの新嘗　賀茂眞淵

千載集

動なく千代をぞ祈るいはや山
とるや榊の色かへずして　藤原經衡

同

天の下のどけかれとや榊葉を
ふかさの山にさし初めけむ　藤原清輔朝臣

新勅撰集

霜八たびおけどみどりの榊葉に
ゆふしでかけて世をいのるかな　紀部忠成

風雅集

名草山とるや榊のつきもせず
神わざしげき日のぐまの宮　紀俊文朝臣

玉矛百首

東の國ことむけて御劒は
熱田の宮に鎮まりいます　平宣長

うけらが花

御劍(みつるぎ)をいはひそめてし昔より
世を照しますふるのみ社　橘千蔭

同

大君のみかさの山もありといへど
鹿島がさきの本つみ社　同

新續古今集　後光照院關白左大臣道平

曇なき御代に光をさしそへて
猶道てらせ玉つ鏡

藤河百首　櫛中納言　定家

祈るより神もさこそは願ふらめ
君明らかに民安しとは

遣遙院内府家着到百首　三光院内大臣實枝

神もまた神にやいのるいやつぎに
君の君をし守る代なれば

拾塵集　多々良政弘

ともすれば人はおこたる神垣に
神やときはの世を祈るらむ

玉葉集

皆人の祈る心も理に
そむかぬ道を神やうくらむ

藤原爲守

新拾遺集

理りの達はぬ道を春日山
神の心と聞くもたのもし

前大納言 經顯

月清集

民の戸へも神の惠にうるふらし
みやこの南神居せしより

後京極攝政前太政大臣 良經

新後撰集

天の下のどけかるべし難波がた
たみのゝ島にみそぎしつれば

神守國經

同

永福門院

天の下治まりぬらし三笠山
あまねく仰ぐ神の惠に

後京極攝政前太政大臣 良經

續拾遺集

千早振別雷の神しあれば
治りにける天の下かな

内裏九十番歌合

治まれる御代にぞいとゞ知られけり
神は正しき道守るかと

爲盛朝臣

續古今集

久にへて君々なれと守るらし
人の國よりわが國のため

平長時

同

八百萬神もさこそは守るらめ
てるひの水の御つかさ

大納言爲家

正木葛

諸人のいのるにつけて安き世も
猶やすかれと神や守らむ

宮内卿永範

千載集

天皇を八百萬代の神もみな
常磐に守る山の名そこれ

中務卿宗良親王

新葉集

諏訪の海や氷を蹈みて渡る世も
神し守らば危からめや

新後撰集

榊とるみかみの山にゆふかけて
祈る日嗣の猶や榮えむ

前中納言 兼仲

續後拾遺集

天地の神のたもてる國なれば
ときはかきはに君ぞ榮えむ

關白大政大臣 冬平

續後拾遺集

民の爲世の爲いのる神わざの
しけき御國は猶ぞさかえむ

度會常長

六帖詠草

幣まつりあがふるまゝに光そふ
神のみ國はいよゝさかえむ

小澤蘆庵

明倫歌集

卷第七

國體歌

後京極攝政前太政大臣良經

玉葉集

我國は天照る神の末なれば
日の本としもいふにぞ有りける

千首

かしこくも照る日の本と名づけたる
曇らぬ君をあるじにはして

中務卿宗良親王

新拾遺集

天地の開けしよりや千早振
神のみ國といひはじめけむ

源智行

後嵯峨天皇御製
續古今集

久方の天よりおろす玉矛の
道ある國ぞ今のわが國

新續古今集

敷島の大和島根をふみそめし
神代の道ぞ今も正しき

榮仁親王

玉矛百首

天の下國は多けど神ろぎの
うみなしませる大八洲國

平宣長

同

大名持少御神のよろしくも
つくりかためし大八洲ぐに

同

家集　楫取魚彦

大名持少彦名の作らしゝ
大八洲國は廣らに厚らに

琴後集　平春海

天地の神や堅めし萬代に
立てゝ動かぬ國のみ柱

同

百千々の代にも動かじ天地の
神のかためし大和島根は

うけらが花　橘千蔭

天の原よさしまつれる日のみ神
てらさむ限り國は動かじ

同

千五百秋としあるからに神代より
瑞穂の國とたゝへけらしも

同

萬葉集　作者不知

敷島や大和の國は言靈の
たすくる國ぞ眞幸くあれこそ

拾遺愚草

天地と限なかれとちかひ置きし
神の御言ぞわが君のため

權中納言定家

新古今集

後京極攝政前太政大臣 良經

敷島や日本島根も神代より
君が爲とや堅め置きけむ

新拾遺集

天地の昔をとへば葦原や
猶そのかみの代々ぞ久しき

讀人不知

續千載集

天地の開けそめぬる神代より
たえぬ日繼の末ぞ久しき

前關白左大臣 家平

夫木抄

唐土の代々はうつれど敷島や
大和島根は久しかりけり

土御門内大臣 通親

同

神代より三くさの寶傳はりて
豐葦原のしるしとぞなる

從一位敎長

琴後集

神代より神の寶ととるゆみを
守となせる國ぞこの國

平春海

新千載集

海原や波にたゞよふ葦芽の
かひある國となれるかしこさ

津守國冬

續現存六帖

神代よりその名しられてわたつみの
波をさまれる浦安の國

内大臣 實繼

風雅集

勅みだれぬ國の障りなく
豐葦原の國ぞ治まる

祭主定忠

詠百首

世を守る千々の社の神しあれば
何か亂れむ葦原の國

中納言長親

新玉津島歌合

幾千代も守りはすてじ敷島の
やまと島根は神の國とて

前大納言公忠

夫木抄

秋津島神の治むる國なれば
君靜にて民も安けし

源仲綱

六帖詠草

愚にも千代萬代といのるかな
こゝはとこ世の大和島根を

小澤蘆庵

風雅集

限なき惠を四方にしき島や
大和島根は今榮ゆなり

民部卿爲定

萬代集

千早振神のさだめし國なれば
古よりも今ぞさかえむ

讀人不知

夫木抄

豐なる七の道のみつぎもの
海山かけて定め置きてき

大納言爲家

琴後集

織出づるこまもろこしの品はあれど
大和錦にしくものぞなき

平春海

詠百首

左中將基綱

天地の神のかためし御國とて
犯しはてたる夷をも見ず

雪玉集

逍遙院内大臣實隆

仰ぎ來て唐土人も住みつくや
げに日本の光ならるむ

太平記

紀朝雄

草も木も我大君の國なれば

玉葉百首

平宣長

天照るや月日のかげを見る國は
本つみ國に仕へざらめや

明倫歌集

卷第八

文歌

後亀山天皇御製
新葉集

集めては國の光となりやせむ
我がまどてらす夜はの螢は

後醍醐天皇 御製
新千載集

數々に集むる玉の曇らねば
これも我世の光とぞなる

宗良親王千首和歌

大納言師兼

君の爲民の爲にとおもはずば
雪も螢も何かあつめむ

村上天皇 御製
後撰集

教へおくことたがはずば行末の

後白河天皇 御製
續古今集

濱千鳥踏みおくあとのつもりなば
かひある浦にあはざらめやは

後嵯峨天皇 御製
續後撰集

知らざりし昔に今やかへりなむ
かしこき代々の跡習ひなば

同

前太政大臣 實氏

傳へきく聖のみ代の跡を見て
ふるきを移す道習はなむ

後撰集

君が爲いはふ心の深ければ
聖の御代の跡ならへとぞ

貞信公 忠平

家集

うつし置きて神代のことも曇なき
文こそ道の鏡とは見れ

儀同三司 實隆

琴後集

天地の遠き初も見てぞ知る
神代の文を手に觸れて

平春海

玉葉百首

上つ代の形よく見よ石上
ふることぶみはまそみの鏡

平宣長

同

まつぶさにいかで知らまし古を
やまとみふみの世になかりせば

同

古今集

神無月時雨ふりおける楢の葉の
名におふ宮のふることぞこれ

文屋有季

うけらが花

かしこきや奈良の都の宮人と
かたらふものは文にざりける

橘千蔭

夫木抄

武士の八十氏文はかたくに
ゆきわかれたる跡ぞ見えける

正三位知家

家集

見おろせば下つ千里のくまもなし
ふりぬる文や高根なるらむ

賀茂眞淵

同

遠つ國知らぬ境のことのはも
ふみゝる道に行きかよひけり

平大平

鈴屋集

書よめば大和唐土昔今
萬のことを知るぞうれしき

平宣長

同

書よめば昔の人はなかりけり
皆今もある我が友にして

同

鈴屋集　平宣長

食ふものは滿ちてもきゆる腹の中に
長く殘るはよめる書なり

同

書よまでなににつれ〴〵なぐさまむ
春雨のころ秋の長き夜

同

をり〳〵に遊ぶ暇はある人の
いとまなしとて讀よきのかな

同

書よめば又たぐひなき樂みを
ふみ見ぬ人は知らぬなりけり

同

千萬の書も年へて怠らず
よめばよみうる物にぞ有りける

同

いろはだにえしらぬ人をはかなしと
見つゝ書見ぬ人ぞはかなき

家集

書よまであそびわたるは網の中に
集まる魚の樂むがごと

權中納言源宗武

六帖詠草

身の後はしみとやならむ昔書
見るとはなしにくたしはてつる

小澤蘆庵

拾遺愚草

徒らに打ちおく書も月日へて

權中納言定家

常山詠草

今はたゞ書より外の友もなし
昔を語る人しなければ

贈大納言源光圀

春葉集

親の親の世をくみしらる水莖の
あとや子の子のしるべにはせむ

荷田東滿

同

踏分けよ大和にはあらぬ唐鳥の
跡を見るのみ人の道かは

同

鈴屋集

からぶみもこれはことよき唐書と
思ひてよめば損ひもなし

平宣長

家集

見る書にしるしおかずば代々かけて
昔をこふる跡はのこらじ

儀同三司實蔭

琴後集

降りゆくこの世のさがも知らざらむ
時見て過き跡をとはずば

平春海

新續古今集

尋ねずばかひなからまし古の
代々のかしこき人のことのは

中納言通俊

續古今集

八雲立つ出雲八重垣けふまでも
昔のあとはへだてざりけり

後京極攝政前太政大臣 良經

六帖詠草

すさのをの神のみ代よりあらがねの
地に傳へて茂ることのは

小澤蘆庵

玉葉集　前大納言爲家

あきつ島人の心を種として
遠く傳へしやまとことの葉

閑田詠草　伴蒿蹊

千々にさくことばの花もすなほなる
心ぞ本の根ざしなるべき

同　同

ことのはの道によらずば嬉しきも
うきも思をいかでしらまし

雲玉集　道遙院内大臣實隆

あはれとや見そなはすらむ
ことのはゝ必ず神の手向ならで

拾遺愚草　權中納言定家

秋津島外まで波は靜にて
昔にかへるやまとことのは

廿六番歌合　權中納言元長

世に廣く仰がざらめや古に
又立ちかへる敷島の道

新拾遺集

天地と共に久しき敷島の
道ある御代に逢ふが嬉しさ

入道二品親王法守

家集

咲く花の匂ふがごとく古ることは
開け立ちぬよ時のゆければ

荒木田久老

うけらが花

から國に生ひぬ櫻の蔭しめて
むれつゝうたふ大和ことのは

橘千蔭

六帖詠草

いかばかり榮えかゆかむ動なき
御代はとこよの大和ことのは

小澤蘆庵

漫吟集

春はもえ秋はもみぢて神代より
をりにつけたる大和ことのは

阿閣梨契沖

新撰六帖

さばかりの朝政しげゝれど
世々に捨てぬは敷島の道

右大辨入道光俊

新千載集

武士のこれや限のをり〳〵も
忘られざりし敷島の道

源和氏

後嵯峨天皇御製 夫木抄

昔へやいかなる繩を結ひおきて
今もその代のことをしるらむ

雪玉集

結びても繩はその世に朽ちぬべし
なかきたもしや水茎のもと

道遙院内大臣實隆

日本紀竟宴

わたつみの千重の白波こえてこそ
八しまの國に文は傳ふれ

橘朝臣直幹

鈴屋集

廣はたの神の御代にぞくだらより
文てふものは奉りける

平宣長

同

古事を今につばらに傳へ來て
文字も御國の一つ御寶

同

曾丹集
耳に聞き目に見ることをうつし置きて
行末の世の人にいはせむ　曾根好忠

拾遺愚草
主や誰見ぬ世のことをうつしおく
筆のすさびに浮ぶおもかげ　權中納言定家

續後撰集
筆の跡に過にしことをとゞめずば
知らぬ世にいかで後はきし　式子内親王

春葉集
昔今の人のことのは花紅葉
筆の林の上にこそ見れ　荷田東満

家集
とる人の力ぞ筆にあらはるゝ
ふみかく道のこれや玉鉾　平大平

新續古今集
見る度に老の涙をそゝぐかな
昔の人の筆のすさびに　讀人不知

閑田詠草
我筆ぞあまり拙き名ばかりを
記すに足ると思ひすてゝも

伴蒿蹊

常山詠草
秋風に列もみだれてゆく雁の
かげ恥かしき筆の跡かな

贈大納言源光圀

續千載集
忍ぶべき人もやあると濱千鳥
かきおくあとを世に絶すかな

式乾門院御匣

琴後集
等閑に書きなすさめそ鳥のあとは
人の心も見ゆといふなり

平春海

詞花集
思ひやれ心の水の淺ければ
かき流すべきことのはもなし

太政大臣 實行

新葉集
思なるほどや知られむ水莖の
あとを心のしるべとも見ば

前内大臣 顯統

うけらが花

橘千蔭

さばかりは言ひもえがたき眞心の
奥をも見する水茎のあと

後二條天皇御製 新拾遺集

我身世になからむ後にあはれとは
誰かいはまの水茎の跡

東關紀行

藤原言員

見る度に涙ぞおつる古の
跡をのこす水茎の跡

新千載集

前中納言公有

書きつくる昔のあとを見るたびに
及ばぬ身こそねは泣かれけれ

續千載集

度會朝棟

行末の名をこそ思へもしほぐさ
かきおく跡の朽ちぬ例に

明倫歌集

卷第九

武歌

大伴宿禰家持

萬葉集

大丈夫の心思ほゆ大君の
みことのさきを聞けば貴み

大舍人千文

萬葉集

霰降る鹿島の神をいのりつゝ
皇御軍に我は來にしを

高橋連蟲麿

同

千萬の軍なりとも言擧げせず
とりて來ぬべきをのことぞ思ふ

平春郷

家集

千萬の軍なりとも千早振る
人をなさゞる故にこそ

新葉集

君が爲わがとり來つる梓弓
本の都にかへさざらめや

前内大臣 睦仁

同

思ひきや手もふれざりし梓弓
おきふしわが身馴れむ物とは

中務卿宗良親王

同

陸奥の安達の眞弓とりそめし
そのよにつかぬ名を歎きつゝ

前大納言 守親

五百番歌合

足乳根のとりはじめたる梓弓
これさへ家の風となりぬる

關白左大臣師基

源藤高

衆妙抄

願くは家に傳へむ梓弓
もと立つばかり道を正して

平春庭

後鈴屋集

とる人の心をさへに引立てゝ
ひそ御神のたけきつはもの

同

とるまゝに猛き心も自ら
ふりおこさるゝ梓弓かな

橘千蔭

同

うけらが花

御執らしの梓の弓は神代より
我大君の守なりけり

讀人不知

拾遺集

四方山の人の寶とする弓を
神の御前にけふ奉る

日本紀竟宴　藤原朝臣　忠紀

久方の天の羽々矢のなかりせば
荒振る人を何かむけまし

萬葉集　笠朝臣金村

大丈夫の弓末振起し射つる矢を
後見む人は語りつぐがね

武家閑談　權大納言源頼宣

武士の弓矢とる名の高見山
猶幾度も越えむとぞ思ふ

金槐集　鎌倉右大臣實朝

物部の矢並つくろふ籠手の上に
霰たばしる那須の篠原

太平記　菊池武時

武士の上矢の鏑一筋に
おもふ心は神ぞ知るらむ

拾遺員外　權中納言定家

百敷や照る日の前にとる矛の
たつる心は神もしるらむ

六帖詠草

武士の手毎にもたる細戈
ちたるの國ぞ猛き國なる

小澤蘆庵

萬葉集

虎に乘りふる屋をこえて青淵に
虻取來む劒太刀もが

境部王

夫木抄

世をはかる人もあらばと物部の
[illegible]

中務卿宗良親王

續千載集

これをだにあだにはおかじ秋の霜
遠き守のかたみとおもへば

山本入道前太政大臣公守

當山紀談

打太刀のかねのひゞきは久方の
天つ空にぞきこえ上ぐべき

三原紹心

平家物語

武士のとり傳へたる梓弓
引きては人のかへすものかは

平景高

太平記

かへらじと兼ておもへば梓弓
なきかずにいる名をぞとゞむる

楠正行

天正記

足ちねの名をばくたさじ梓弓
いなばの山の露ときゆとも

平信孝

墓碑集

二つなき理(ことわり)しらば武士(もの)の
仕ふる道は倶なからむ

源持資

同

かゝる時さこそ命の惜からめ
兼てなき身と思ひ知らずば

同

臨仁略記

惜むとて今まではよもながらへじ
身を捨てゝこそ名は殘りけれ

西行法師

常山紀談

骸(かばね)をば岩屋のこけに埋みてぞ
雲井の空に名を留むべき

高橋紹運

常山紀談

命より名こそをしけれ武士の
道にかふべき道しなければ　　森迫親正

同

名の爲に捨つる命はをしからじ
終にとまらぬうき世と思へば　　平塚爲廣

風雅集

命をも輕きになして武士の
道より重き道もらもやは　　源致雄

四戰記聞

我君の命にかはる玉の緒を
何いとひけむ武士の道　　烏井勝高

三草集

世の人に劣らじとおもふ一筋は
老もへだてぬ物部の道　　少將源定信

雲錦集

大日本神代ゆかけて傳へつる
をゝしき道ぞたゆみあらすな　　賀茂季鷹

うけらが花

千萬の仇にむかひて走り猪の
かへり見せぬを心ともがな　橘千蔭

家集

虎吼る國の境も物部の
守るかぎりは安けかりけり　小野古道

明倫歌集

卷第十 雜部

拾遺歌

風雅集

伏見天皇御製

天つ空照る日の下にありながら
曇る心の隈をもためや

雪玉集

曇らぬを神代のまゝの心ぞと
空にいさめて月や澄むらむ

道遙院内大臣實隆

新葉集

霞む夜の月を見るにも曇らじと
思ふ心を猶みがきつゝ

權大納言　守房

新古今集

海ならずたゝへる水の底までも
清き心は月ぞ照らさむ

菅贈大政大臣道眞

風雅集

誰も皆心をみがけ人を知る
君が鏡の曇なき世に

權大納言　資明

春葉集

知るや人たもつ心の玉だにも
みがくにつけて光ありとは

荷田東滿

金玉詞林

人多き人の中にも人はなし
人になれ人ひとになせ人

讀者不知

紫式部

家集

わりなしや人こそ人といはざらめ
みづから身をや思ひすつべき

伊藤維禎

同

人ばかり劣りしもせじ月も日も
何か昔の空にかはれる

山上憶良

萬葉集

男やも空しかるべき萬代に
語りつぐべき名は立たずして

大伴宿禰家持

同

大丈夫は名をし立つべし後の世に
聞き繼ぐ人も語りつぐがね

大伴宿禰家持

同

敷島や大和の國に明らけき
名におふ伴のを心つとめよ

同

同

劍太刀いよゝとぐべし古ゆ
さやけくおひて來にしその名ぞ

家集

劍太刀名をとゞめずは草木にそ
均しかるべき大丈夫のとも

富士谷成章

後京極攝政前大政大臣良經

續古今集

埋れぬ後の名さへやとめざらむ
爲すことなくてこの世くれなば

道命法師

千載集

ともかくも我身一つはなしつべし
殘らむ名こそ後のたけれ

風雅集

水上のすめるをうけて行水の
末にも濁る名をば流さじ

大江廣秀

玉矛百首

代々の親のみかげ忘るな代々の親は
己が氏神己が家の神

平宣長

同

父母は我が家の神吾神と
心つくしていつけ人の子

同

三草集　少將源定信

假の世とこの世をいはゞ君と親の
恵はいかゞ人に答へむ

同　同

子を思ふ心の道の心もて
親につかへよ世の中の人

東歌　橘枝直

臣のわざつくすとならば劣れるを
恥まむことを恐るなよゆめ

五百番歌合　兵部少輔中原遠忠

誰も世につかふる道は夏草の
ことしげくとも厭はざらなむ

玉矛百首　平宣長

天照す神の御民ぞみたからを
おほろかにすなあつかれる人

鈴屋集　同

世中は何につけても神を思へ
神の恵をゆめわすれるなよ

鈴屋集

いざ子どもさかしらせずて玉ちはふ
神のみしわざ助けまつらへ

同

玉矛百首

ぬえ草の妻子やつこらは皇神の
授けし寶うつくしみせよ

平宣長

漫吟集

淺茅原かれふの床に子をおきて
ふる涙雨や心変なる

阿閣梨契沖

新撰六帖

出羽なるひらかのみ鷹立かへり
おやの爲には鷲もとるなり

右大辨入道光俊

詠百首

思へたゞ心なぎさの鴛鴦だにも
よその妻には流れあふかは

越前

今昔物語

かぞいろはあはれとも見よ燕すら
ふたりは人に契らぬものを

讀人不知

萬葉集

紅はうつろふものぞ橡(つるばみ)の
なれにし衣(きぬ)に猶しかめやも

大伴宿禰 家持

新古今集

さらぬだに重きが上のさよ衣
我つまならぬつまな重ねそ

寂然法師

六帖詠草拾遺

我宿のつまだにあるをあやめぐさ
よそにはかけじ袖の露も

小澤蘆庵

古今集

女郎花多かる野べに宿りせば
あやなくあだの名をや立ちなむ

小野美樹

同

女郎花後めたくも見ゆるかな
あれたる宿に獨たてれば

兼覽王

同

今ぞ知る苦しきものと人待たむ
宿をばかれずとふべかりけり

在原業平朝臣

漫吟集

あさるとて己が友よぶ庭つ鳥
とりにもしかず人の心は

阿闍梨契沖

三草集

うらおもてかはらぬ人を友とせよ
この手柏のとにもかくにも

少將源定信

後撰集

直き木に曲れる枝もあるものを
毛をふき疵をいふかもりなさ

高津内親王

雪玉集

見ずやいかに曲れる枝におほはれて
直き梢のあらはれぬ世を

道遙院内大臣實隆

千首和歌

杣山や茂きいばらの中を見よ
老木も人のひかぬものかは

中務卿宗良親王

古今集

形こそみ山隠れの朽木なれ
心は花になさばなりなむ

源慶法師

春葉集
位山高根の松もあるものを　荷田東滿
麓もしらぬ谷の埋木

閑田詠草
み山木の本のすがたぞ忍ばるゝ　伴蒿蹊
人の心の花になる世に

家集
手折らじな人の垣根の梅の花　寂身法師
われにて知りぬ惜き心は

古今集
さく花におもひつく身のあぢきなさ　讀人不知
身にいたづきの入るもしらずて

家集
・盛をばとふ人多し散る花の　正覺法師
あとをとふこそ情ありけれ

古今集
色見えでうつろふものは世中の　小野小町
人の心の花にぞありける

詞花集

まこもぐさつのぐみわたる澤邊には
繋がぬ駒も放れざりけり

俊惠法師

家集

はかなしや筒井の蛙我ばかり
外をもしらぬ淺き心は

藤原爲顯

古今集

蓮葉のにごりにしまぬ心もて
何かは露を玉とあざむく

僧正遍昭

同

後まきのおくれて生ふる苗なれど
あだにはならぬ頼みとぞきく

大江千里

三草集

何事も養ひて見よ秋の田の
稲葉も本は植ゑし早苗を

少將源定信

堀河百首

庭もせに朝ごと稲を干すよりも
はてをゆひてぞかくべかりける

隆源法師

古今集

み山には霰ふるらし外山なる
正木のかつら色づきにけり

讀人不知

玉葉集

早き瀬の水の上には降り消えて
氷るかたよりつもる白雪

讀人不知

後村上天皇御製

新葉集

年寒きためしは誰も習ふらむ
松につもりの浦の白雪

古今集

雪ふりて年の暮れぬる時にこそ
遂にもみぢぬ松も見えけれ

讀人不知

新拾遺集

知られじな氷をかつく鴉鳥の
底にくだくる心ありとは

攝政太政大臣 良基

古今集

蜑のかる藻に住む虫の我からと
ねをこそ泣かめ世をば恨みじ

典侍藤原直子朝臣

春葉集

世をうしと難波のえやは恨むべき
わざもあしかる身を知らずして

荷田東滿

詠百首

津の國の難波のことにつけつゝも
よしをばあしといひなかくしそ

源家長

閑田詠草

よしあしに移る習ひを思ふにも
危きものは心なりけり

伴蒿蹊

家集

世を渡る習ひよ身には危きを
誰か心のまゝのつぎはし

權大納言雅俊

六帖詠草

思ふこと末もとほらじ橋の名の
跡絶えしまゝにかけも繼がずば

小澤蘆庵

風雅集

心だに我思ふにはかなはぬを
人をうらみむ理ぞなき

從二位爲子

新葉集

さのみやは理しらで恨むべき
身のうきにこそ人もつらけれ

前太政大臣 公賢

詞花集

おのが身のおのが心にかなはぬを
思はゞ物は思ひしりなむ

和泉式部

風雅集

思ひしる心とならば徒(いたづら)に
あたら此世を過さざらなむ

寂然法師

家集

一筋に思ひ定むる心だに
あらばうき世を歎かざらまし

正三位成實

續後拾遺集

一筋に人をも身をもおもふかな
打つ墨縄の直かれとのみ

前中納言定房

閑田詠草

ほど〳〵にふしなかりせば呉竹の
直きも頼むかひやなからむ

伴蒿蹊

東歌

野邊に生ふるいさゝ村竹いさゝめも　橘枝直
人の爲よきことはかりせよ

漫吟集

うきふしもしばしまちみよ竹の子の　阿闍梨契沖
生ひそふ後のかげもこそあれ

うけらが花

竹の根の下はひわたるふしのまも　橘千蔭
けふの日かげをあたに頼みな

古今集

何をして身の徒に老いぬらむ　讀人不知
としの思はむことぞやさしき

拾玉集

大空の思はむこともはづかしな　前大僧正慈鎮
さし仰ぎつゝかくて過さば

家集

いそがずばぬれざらましを旅人の　源持資
あとより晴るゝ野路の村雨

雪玉集

武士の矢ばせの船は早くとも
いそがばまはれ瀬田の長橋

源俊頼

續後撰集

最上川人をくだせばいな舟の
かへりて沈むものとこそきけ

寂然法師

閑田詠草

末遂に海となるべき山水も
しばし木のはの下くゞるなり

伴蒿蹊

雨夜灯

遠くなり近くなる海の濱千鳥
鳴く音に潮のみち干をぞしる

讀人不知

古今集

底ひなき淵やはさわぐ山川の
淺き瀬にこそ仇波は立て

素性法師

六帖詠草

山川の底のさゞれも數ふべく
見ゆるは水のすめばなりけり

小澤蘆庵

漫吟集

大方の人はことのみよしの川　阿闍梨契沖
瀧の白玉緒をぬかずして

同

浮草の身こそ浪にもしたがはめ　同
などか心のねをたえぬらむ

新古今集

浮く草の一葉なりとも磯がくれ　寂然法師
思ひなかけそ沖つ白波

順德天皇御製
續古今集

憂しとても身をばいづこにおくの海の
鵜のゐる岩も波はかくらむ

古今集

世を捨てて山に入る人山にても　凡河内躬恒
猶うき時はいづち行くらむ

同

筑波山端山繁山しげけれど　源重之
おもひ入るには障らざりけり

古今集
天雲のたえず棚引く峯にだに
すめば住ぬる世にこそ有りけれ　惟喬親王

玉葉集
山里をうき世の外の宿ぞとは
すまでおもひし心なりけり　中務卿宗良親王

拾遺集
手枕のすき間の風も寒かりき
身はならはしの物にぞ有りける　讀人不知

拾遺集
一重なる人もぞあると世を知れば
薄き衾もさえぬ夜半かな　多々良政弘

三草集
事足れば足るにも馴れて何くれと
足るが中にも猶歎くかな　少將源定信

家集
たまくに人とある世をうき時は
背かまほしくおもふはかなさ　賀茂眞淵

六帖詠草

世のうさも忘るゝ酒に醉ひしれて
身の憂そふ人もありけり

小澤蘆庵

同

ことのはの多かるよりや自から
誠すくなき罪もうくらむ

同

同

なすわざにおのが心はかくれぬを
人は知らじと思ひけるかな

古今集

偽のなき世なりせばいかばかり
人のことのは嬉しからまし

讀人不知

月清集

世の中に虎狼は何ならず
人の口こそ猶まさりけれ

後京極攝政前太政大臣 良經

桂園一枝

唐土の虎ふす野べにふく風の
めにみぬ處おそろしの世や

香川景樹

後撰集
なき名ぞと人にはいひてありぬべし　讀人不知
心のとはゞいかゞ答へむ

新勅撰集
身のはてよいかにかならむ人しれぬ　左中將公平
心に恥づる心ならずば

春葉集
身を守る心の關しまさしくば　荷田東滿
世にまがごとのいかで出でこむ

閑田詠草
さしてゆく心の道し直からば　伴蒿蹊
何か人目をはゞかりの關

續千載集
立かへり又君が代に逢坂の　一條内大臣内實
こゆる關路に末も迷ふな

風雅集
大丈夫はしか待つことのあればこそ　皇太后宮大夫俊成
茂き歎きもたへしのぶらめ

春葉集

大丈夫や折にふれては猛り猪の
猛き心もなどなかるらむ

荷田東満

漫吟集

足引の山を拔くてふ手力も
身にはおもはず心にもがな

阿閣梨契沖

後餘屋集

輌の音きこえぬ國と梓弓
ゆるぶなる丈夫のとも

平春庭

琴後集

治れる御代の守りの梓弓
ひきなゆるべそ物部の道

平春海

うけらが花

葛城の襲津彦眞弓弦はげて
ゆるべぬをこそ心とはせめ

橘千蔭

家集

いざこども心あらなむみちのくの
千島の蝦夷もやさしとぞきく

賀茂眞淵

新古今集

成尋法師母

唐土も天の下にぞありときく
照る日の本を忘れざらなむ

肖像自讃

平宣長

敷島の大和心を人とはゞ
朝日に匂ふ山ざくら花

雪玉集

逍遙院内大臣實隆

君を仰ぎ民を治むる理の
正しき道ぞ萬代のため

聖武天皇御製
萬葉集

大丈夫のゆくとふ道ぞおほろかに
思ひてゆくな大丈夫のとも

の書今より後、世の中に滿ちたらひて、人の心によく染みなば、ひとつには他國のなしへならでも、元來より神の味道ある事をさとり、ふたつには、邪なる妖言に相まじはり日會ことなくして、直く正しきに移ろひ、みつには、細戈千足(くはしほこちたる)の國振しるく、猛く雄々しきともがら、貢寶の數へもあへず、出來なむ物ぞと、よろこびに堪へずして、そのよしいさゝか記せるは、葉かへぬ松に枝をつらねて、濁りなき德川の流を汲める、

文久元年十一月　源頼位朝臣

學習院大短期
第572號
受入
縣城中文學校
寄宿舎
圖書